



# 樂園輪舞曲



伽藍

灼き付く、赤。

それは、悪夢のような光景だった。

赤。

赤。

赤。

視界の全てが、赤に埋め尽くされている。

赤。

赤。

全てが。

赤。

眩暈がした。

「……お母さん？」

呼んだ声が、掠れる。

木造の、自分の家の前で、少女は呆然と佇んでいた。

彼女——クロスは、何が起こったのだろうか、と思った。自分は、村の外れに水を汲みに行  
って、そう、それで。

そろそろ湯浴みの時間だからと。

王都のように、便利な装置などはクロスの村までは出回っていないのだ。

いつもならば、夕飯の準備が出来る頃合だった。

「お母さん……？ お父さん!？」

赤。

視界に広がる、赤。

家が、燃えている。

家が。

違う。

村が。

少女を育てた、全てが。

ああ、そうだ、クロスの世界の全てが、燃えているのだ——それを理解した瞬間、彼女の世  
界が、視覚とは無関係に赤く染まった。

点々と散らばる家の全てで、炎が上がっている。

これは、自然な発火ではない。

「クロス姉ちゃん——」

細い声に呼ばれて、弾かれたように振り返る。彼女の半分程の年齢の少女が、クロスに向けて  
手を伸ばしていた。

「……——！」

声は、届かない。

手は、彼女が掴むよりも早く、地に落ちた。

投げ出された、枯木のように細い四肢。

倒れ込んでいる少女の背中、明らかに斬り付けられた傷。

「———あ……っ」

その隣に座り込んで、顔を覗き込む。既に少女の瞳は光を失っていた。

かっ、と、瞼の裏に灼熱が宿る。

「誰が——誰が、誰が、誰が誰が誰が……！」

視界が、赤い。

視界が、赤く染まる。

思考まで。

眩暈がした。

村が燃えている。家が燃えている。倒れている人々は数え切れない。

「生、存者、を……」

情けなく震える声で、それでも自分に言い聞かせるように、彼女は口に出した。生存者の確認をしなければ、と。

思考が赤く染まる。

全てが。

自分一人が、世界から切り離されたかのような、錯覚。視覚も聴覚も何もかも、役には立たなくて。

だからそれは、唐突だった。

「——あ？ 何だ、生き残りがいたのか」

「……………」

唐突に。

視界が、色を取り戻す。

「…………—」

心は、不自然に凧いでいた。

それは、その一瞬で、その一言で、彼女が全てを察したからかも知れない、ゆっくりと振り返る。

赤い。

全てが、全てが、全てが、赤い。笑って仕舞うくらいに。

赤の中、焼け付く青。

呪いのように浸み渡る、青。

冗談のような、青。

子供が悪戯に塗りたくったような、青。

不自然な、人工的な、青。

赤の悪夢が、青に染まり、潰されて、変わる。

「……………あ——」

視界の青に反して、染まる赤。

思考が。

「……んん？ 何だ、女かと思ったら、野郎かよ」

舌打ち。言葉は、耳に入らない。

「ま、でもそこそこかな……。おい、大人しく——」

「あ」

視界が、染まる。怒りの赤に。

「あああああああああああ！」

この男だと——村を燃やし家を燃やし友を燃やし、そして家の前で転がっていた両親を殺したのは、この男なのだと、理解して。

クロスは、叫びとともに青い髪の男に斬り掛かった。彼女自身の髪と同じ銀が、凶暴に光を弾く。

「貴様アアアァァ！」

「おっと……あつぶね。何つうガキだ」

「その首、斬り落としてくれる！」

「へえ」

振り下ろされた刃を同じく細身の剣で受け止めて、青い髪の男は眼を見開いた。それは、全体重を掛けた踏み込みが、彼の予想よりも遥かに速く、しかし軽いものだったからかも知れない。

「気付かなかったな——お前、女か」

「ぐっ！」

容赦無く、瘦身の脇腹を蹴り飛ばす。低い呻きとともに吹き飛んだ少女に、男は奇妙な明るさで笑った。

「面白え。殺さないでおいてやるよ」

「クソが——名を名乗れ、下郎！」

序でとばかりに斬り付けられた右足を押さえながら、クロスは吼えた。いっそ優しげに、男は口を開く。

「良いぜ、教えてやるよ。俺は——」

刻み付ける、ように。

「パール」

霞む視界に、尚滲む事を知らぬ、青。急速に落ちる意識の中、最後に焼き付いたのは。

「青い、蝶……？」

何もかもを奪い尽くされたその村で、次にクロスが眼を覚ましたのは、同じく一晚村から離れ

ていたウィリアムに泣きそうな声で呼ばれた朝だった。

王都は、王城を中心に、同心円状に大通りが数本あり、そこから蜘蛛の巣を張るように小路が広がって、街並みが形成されている。

王城の横に聳える小さな塔は、赤煉瓦を主な建材にしている中で唯一白煉瓦を使っており、その存在意義も相俟って平和な街で際立った存在感を放っていた。

国家治安維持組織、《エデン》本部――国内各所に配置された警備隊を総括する役割を担っているのが、この白い塔である。

その、塔の一室で。

のんびりと紅茶を飲みながら街並みを見下ろしていた男が、思い出したように顔を上げた。

「あァ、そう言えば」

部屋の奥に座る小柄な影に話し掛ける。

「知ってます？」

「……あん？」

話し掛けられた方はといえば、訝しげにそう声を上げただけである。

「前置き無しに『知ってます？』言われても判る訳ねえだろうが。馬鹿か？」

明らかに年下の人間に馬鹿呼ばわりされても、男――ジェスターの笑顔は揺らがない。寧ろ一層楽しげな様子でくるくると回った。

「そりゃ失礼！ あの男ですよォ、ほら――」

ばさり、と無造作にも見える仕草で机の上に資料を放り投げると、判り易く子供の眉が上がった。

興味を惹かれたらしい反応に、やっぱりなァと溜め息を吐く。

「なァんか、最近この辺を彷徨ってるって話でエ」

「相変わらず、うっかり叩き斬りたくなるな、その口調」

「イエイエ貴方も他人の事言えませんヨー」

さらりと物騒な事を言われて、ジェスターは一步影から離れながらもしっかりと言い返す事は忘れない。

資料を一瞥した子供はといえば、至極楽しげな表情で。

「へえ……面白そうじゃねえか」

「やれやれ、これだからクソガ――流石ァ、正義感に溢れていらっしゃる！」

チキ、と子供の剣が鳴ったのに気付いて、ジェスターはいっそ潔く台詞を言い直した。相手は脱力して剣から手を離す。

「聞こえたぜ、ジェスター」

「オヤ」

ジェスターはびたりと動きを止めて、軽く咳払いする。

「では、失敬して。あァもう嫌ンなるなァ子守なんて！」

「……うん、死ぬか？」

にっこり、男と子供が笑い合った刹那、部屋の扉が吹き飛ぶ勢いで開け放たれた。隠そうともしない気配に当然気付いていた二人は、男が飛び込んで来ても身構える事すらしない。

「ジェスター、貴様アアア！」

「おう、扉壊したら弁償だぜナナちゃん」

「アハハ、お帰りなさいナナちゃん感動だヨ生きてたなんて久し振り！」

「誰がナナちゃんか！」

二人に同時に切り返してから、『ナナちゃん』と呼ばれた男――ナナトは、ジェスターに向き直った。

「ン？」

ことり、と態とらしく首を傾げる同年同期の男に、自分を落ち着けるように二度、三度深呼吸する。

「貴様……！ また情報が間違っていたぞ！ 俺を殺す気か!? 恨みでもあるのか!? 殺す気なんだなそうなんだな!？」

「まあまあ、そう怒らず」

「怒らいでか！ ……ああ、有り難う――ってそうじゃなくてだな……！」

「気分を落ち着けるにはカモミール。世界の常識ですよー」

のんびりと渡されたカップをうっかり受け取ってから肩を震わせるナナトに、ジェスターはこころと笑った。

「大体、いくら情報部だからって何でもかんでもワタシに言わないで欲しいなァ」

「喧しい！」

微妙に噛み合わない二人の会話を聞き流しながら、我関せずで資料を読み進めていた子供は、ことりと無邪気な仕草で首を傾げた。

「《ユリシーズ》――」

口の端だけで、笑う。

「青い、蝶？」

クロスの髪は、短い。

銀の髪は、光を弾いて刃めいた煌きを宿している。長身に剣を佩いたその姿は、多くの女性の視線を惹き付けていた。

いつものようにいつもの通り、注目を浴びながらも気にする事無く颯爽と歩いていたクロスは、ふと鼓膜を震わせた騒ぎに歩みを止めた。

「……クロス？」

数歩先に行き、横に誰もいない事に気付いて振り返ったウィリアムが、きょとんと首を傾げた。クロスと同じ年頃の、気弱げな少年である。

「どうかした？」

「あれ見ろ」

ついと細い指で示されて、言われるがままウィリアムが視線を滑らせる。その先にあった光景に、彼は正直に顔を引き攣らせた。

激しく感じた嫌な予感にそろりとクロスを見遣り――そして彼は、相棒から投げ渡された荷物を、慌てて受け取る破目になった。

「ぶっ――！」

「ウィル、任せた」

「ちょ、ま、……えええ!？」

眼を白黒させているウィリアムに構わず、クロスはその光景へと近付いて行く。即ち――数人の男に囲まれている、少女の元へと。

「あの、済みません、仕事が……」

「良いだろ、姉ちゃん」

「ちょっと付き合ってくれば良いからさ……」

云々。

「………おいおい――」

あまりにも頭の悪い会話に頭痛がして、クロスは聴覚から意識を遮断した。男四人と、少女一人。ぐりぐりと自分のこめかみを揉みながらも、彼等の間に割り込んで、ざっと仁王立ちになる。

「ちょっと失礼」

四人の身長は、クロスよりも低い。鋭い眼光で長身の美少年に見下ろされて、男達は揃って一歩後退った。

それから、自分が引いた事を誤魔化すように氣勢を上げる。

「何だ、クソガキ！」

「邪魔すんなよ、怪我してえのか!？」

「……うん」

クロスは瞬いた。そうすると、雰囲気は一気に柔らかくなる。それに男達は、一気に毒気が抜けたような顔をした。

「な、なん、何だよ……？」



「私は十六歳だから、『ガキ』と言われる程の年じゃないかな。ああ、因みにそちらの雀斑はウィリアムと言ってね、彼も同い年だ、宜しく」

「ちょ、僕まで巻き込まないで！」

はらはらしながらも大人しく遠くで眺めていたウィリアムが、唐突に名指しされて情けない悲鳴を上げる。

幸い、男達はウィリアムをちらと見た後、クロスに視線を戻した。相手にする必要が無いと思われたらしい。

「わあ、凄い屈辱……いや、別に良いけど！ 寧ろ助かるけど！」

ぼそり、落とされた少年の呟きは、誰の耳にも届かなかったようだ。仕切り直しとばかりに、男達は改めてクロスを睨み付ける。

「……で、何なんだよ、お前はよォ!？」

「いや、何も気にする事はない。私はただの通りすがりだからね。ただし——」

そこで。

それまで、ただ無防備に立っているだけだった長身が、唐突に沈んだ。

「え、……へ？」

「ちょっと、悪いな」

独り言のように口にして、クロスは踏み込んだ。低くした体勢から跳ねるような動きで伸び上がり、その勢いのまま真っ正面に突っ立っていた男の顎を肘で打ち砕く。

誰も反応する事は出来なかった。

そこからは、一方的だった。二人目の男の足を器用に掬い上げて、ふわりと無防備に浮かんだ体の腹に左足を叩き込む。三人目は惚れ惚れする程見事な回し蹴りを受けて綺麗に吹き飛んだ。

「て、てめ……！」

漸く反応した最後の男は、殴り掛かった所ですっかりと頭を鷲掴みにされ、疑問に思う間もなく顔面に膝を打ち付けられて地面に沈んだ。

「「……………」」

その間、僅か十秒もないだろう。助けられた少女と傍観していたウィリアムは揃って絶句した。周囲で様子を伺っていた通行人達も呆然としている。

「ク、クロス……」

「お嬢さん」

「ちょっと!？」

ウィリアムの呼び掛けをきっちりと無視して、クロスは少女に向き直った。長身の美少年に見下ろされて、少女は顔を赤らめる。

「は、はい！」

「大丈夫か？ 全く、災難だったな、こんな馬鹿共の所為で——ああ、でも」

桃色に染まった頬にすいと指を滑らせて、クロスは微笑んだ。

「声を掛けたくなる気持ちは判るかな、君みたいに魅力的なお嬢さんならね」

「へ、あ、あの」

最後に柔らかい髪を一撫でして、細いが少々硬い手があっさりとは引いていく。それに僅かに名残

惜しそうな顔をした少女には気付かず、クロスは当然のように彼女に言った。

「さ、家まで送ろう。なに、こちとら流れ者さ、心配はないよ——うん？」

台詞の途中でクロスは漸く、顔を真っ赤にさせて俯いた少女の様子に気付いて首を傾げ——そして、それを見事に曲解した。

「ああ、そんなに恐かったんだな——大丈夫、安心して。そんなにして、涙を堪える必要はないよ——」

微笑む美少年と、頬を染める少女。

「……………」

その様子を蚊帳の外で見ていたウィリアムは、一気に気が抜けて、ぐったりと頭を抱えて空を仰いだ。

「相変わらず男前過ぎるよ、クロス——」

困っている少女を颯爽と助けた、まるで童話の中の王子様のような美少年——に、見られているであろう旅の相方に向けて、呟く。

「……一応、女の子なのに」

少女は走る。

自分の荒い呼吸が、酷く耳に障った。

少女は走る。

小鹿のそのような足が、不意に纏れる。お気に入りの桃色のワンピースは、スカートの部分が広がっていて走り難い上に、ひらひらと余計な装飾が多くて動きが制限されて仕舞うのだ。

危うく転び掛けた体の重心を無理矢理に戻して、少女は走る。

「はぁ……ッ！」

息を吸うのも精一杯といった風情で、彼女は足を動かし続けている。

少女は、追われていた。

「誰か……！」

悲鳴のような声を上げて、少女は、走る。

地を蹴る。地を蹴る。地を蹴る。少女の全力疾走は、当然のように大人の男よりは遅いのだ。

後ろから追って来る、数人の男の声。それが一層、少女の恐怖を煽る。

早く振り切らなければ、仲間を呼ばれて仕舞うかも知れない——幼いが美しい少女の顔は、哀れにも引き攣っていた。

か細く頼りない足を、必死に動かす——その勢いのまま大きな通りに飛び出した瞬間、彼女は何かにつづかって吹き飛ばされた。

「きゃあ！」

「……っと——」

地面に転がるかと思われた少女の体は、優しい腕に支えられて事なきを得る。

「え……？」

「済まない、大丈夫か？」

耳に心地良い、低く柔らかい声。それに力が抜け、少女は崩れ落ちそうになった。

腕の主を見上げる。刃の色の髪が印象的な、美少年だった。

「……あ——」

引き攣れた声が少女の喉から漏れるのに、少年が眉を寄せる。

「どうした、どこか怪我でも……」

「助けて！ 追われているの！」

薄桃の唇から出たのは可憐な容姿を裏切らぬ鈴の音のような声だったが、それは恐怖と恐慌に震えていた。

「追われている？ 何事だ——」

言われた相手が、眉を顰める。恐らく、少女よりも幾つか年上だろう。長身の、整った顔の少年。

「男の人が、後ろに……」

「——穏やかじゃないなあ」

それを聞いて、動じるでもなく、彼は嘆息した。

少女の頬は、恐怖の為か白く色を失っていた。白磁の肌は透き通るようだ。落ち着かせる為に

手を置いた肩は細く、微かに震えていた。

彼女の主張と同時、近付いて来た喧噪に、少年は嘆息した。迷惑がられたと思ったのだろう、慌てて離れようとした小さな体を引き寄せて、優しく頭を撫でる。

少女は金髪碧眼の、宗教画に描かれる天使のような容貌をしていた。緩く波打つ短い髪に指を滑らせ、彼は相手を安心させるように微笑む。

「可愛いお嬢さん、良い子だから下がっておいで」

恐らくは少女の年齢を考えても、平均よりやや小柄だろう。困惑したように眉根を寄せる彼女に、少年は悪戯っぽく片眼を瞑って見せた。

「愛らしい天使にちょっかいを出すような不逞の輩は、私が退治で進ぜよう」

「あ、あの、貴方は……」

姿を見せた男達に腰の剣を鞘ごと抜き放ちながら、彼はちらりと少女を肩越しに見遣って軽く肩を竦めた。

「ああ、これは失礼。名乗っていなかったか――」

身長こそ少年よりも低い、彼より遥かにがたいの良い男達数人を相手に怯む様子もなく。

「私は、クロスという」

クロスという少女は、下手な男性よりも数段男前である。

それは、彼女を知る人間皆が揃って認める事実だ。――加えて、無自覚な女誑しであるという事も、ウィリアムは知っている。

剣の腕は一流。飽く迄女性なので腕力こそ男には劣るが、それを補って余りある技術を有している。その上、体術も修得しているのだ。

強い、と評して、反論する者はなかなかいないだろう。何よりウィリアムこそが、誰よりも彼女の強さを知っていた。

それでも尚、彼が女性であるクロスの心配をして仕舞うのは、旅の同行者として、そして同じ村で育った幼馴染として、致し方ない事なのではないかと思うのだ。

一人旅よりはマシといっても、ウィリアムは自分が決して他人から強くは見られない事を判っていた。女性の旅人というものの危険性も理解している。だからこそ、提案して普段からクロスに男装させているのだ。

客観的に考えて、それは見事に成功していると言えた。元々があの性格な上に、声も容姿も、可愛らしいというよりも寧ろ他の女性から格好良いと褒めそやされる類のものだ。普段から男性的な服を好んでいた為に、所作が一般的な女性のものとは違っているというのも、理由に挙げられる。

要するに、クロスという少女は、知らぬ人間から見て、完全完璧に、非の打ち所が無い、――美少年であった。

何故誰も気付かないのかとクロスは複雑そうにしているが、ウィリアムはそれで良いと思っている。事実、彼女の男装を見破る人間なぞ、なかなかいるものではなかった。

だが、しかし、それでも、――尚。万が一の事があったらと思うと、ウィリアムは眼の前が真っ暗になったような感覚に襲われるのだ。何度となくクロスに過保護だなんだと文句を言われていても、こればかりはどうしようもない。

今朝、目覚めた時に隣の相方の姿が消えていて、買い物をしてくるという旨の書き置きだけが残っていた時も、彼は倒れそうになった。飛び出したいのを堪えて健気に宿で待っているのは、クロスが帰ってきた時にウィリアムがいないと、またあっさり一人で出歩いて仕舞う事が簡単に予想出来たからだ。

だから、彼は相方の少女が――対外的に言えば少年が――帰ってきた時に後ろにいた小柄な女の子を見た時、開口一番こう言った。

「元いた場所に返して来なさい！」

その声にはいっそ哀切すら籠もっており――しかしクロスはそんなウィリアムに驚いて身を引いた少女を守るようにして一步踏み出し、きっと瞼を吊り上げた。

「阿呆か！ 犬猫じゃないんだぞ！」

「犬猫ならこんな事言わないよ非常食にもなるし――ってああ、そんな事じゃなくて！」

ウィリアムは頭を抱えた。一体何年、自分はこの幼馴染に振り回されてきたのだろう。

一見すると、天使が降りたのかと考えたくなるような少女だった。どうせいつものように、男か何か絡まれていた所を助けた上に誑し込んだのだろう。

クロス本人が聞けば心外なと片眉を上げそうな、しかし冷静に考えて最もありそうな予測を立てたウィリアムは、当の少女が泣きそうな顔をしているのに気付いた。

「あ、あの、ごめんなさい、あたし――」

「ああ、この馬鹿は気にしないで」

流石に内心で焦るウィリアムを軽く一睨みしてから、クロスは少女を見下ろし、安心させるようにか細い右手を両手で包んでやる。

「ほら、そんな表情をするな。天使のような君がそんなに憂いた顔をしていては、折角の快晴も忽ち厚い雲に覆われて仕舞うよ」

端で見ていたウィリアムは、よくそんな台詞を口に出来るものだといっそ感嘆した。普通の男が言っても鼻で笑われるであろう言葉も、クロスが言うと見事に様になるのだから不思議だ。

「あ、有り難う……」

クロスはにっこりと笑った。

「うん、やっぱり笑っていた方が素敵だ。――なあ、ウィルもそう思うだろ？」

何気ない仕草で、柔らかい表情のままウィリアムに視線を向けながらも、その瞳の奥に宿る物騒な光に、少年は潔く白旗を上げた。

どうせ自分は、この少女には敵わない。

「そうだね――ごめんね、お嬢さん。取り敢えず、宿に上がって、ゆっくりして。話くらいは、聞けると思うから」

少女は美しかった。

年は十四だという。人形のように可愛らしい少女一人を、複数人の男で追い回すなど言語道断だと憤慨するクロスに、ダリアと名乗った彼女は緩く首を振った。

「実は、訳があって……」

「そうなのか？ 私はまたてっきり、性質の悪い誘いか何かかと思っていたが……」

事情も知らずに助けたのかと――いつもの事ではあるのだが――肩を落としたウィリアムと、眼を丸くしたクロスに、ダリアは申し訳なさそうに眼を伏せた。

「ごめんなさい、本当に、迷惑を掛けて――」

「ああ、気にしないで、ダリア。素敵な名前じゃないか。その笑顔で、あの花のように私を慰めてくれないか。そんな顔をしていたら、私も悲しくなって仕舞う」

「クロス……」

ウィリアムは最早ぐったりと言葉もない。それでも流石にこれ以上幼い少女の気を病ませているのも忍びなくて、相方に同調するように頷いた。

「さっきはごめん、大丈夫だよ。寧ろ、クロスが一方向的に振り回しているみたいで、悪いと思ってるんだ。彼、お節介だから」

「誰がお節介か！」

言われたクロスがひょいと眉を上げると、ダリアは漸く、少しだけ頬を緩ませた。

「有り難う御座います、あの……」

それから、意を決したように息を詰めて、口を開く。

「実は、あたしのお父様が、《エデン》の人だって、知られて仕舞って――」

「「《エデン》！」」

思わぬ名に、クロスとウィリアムが顔を見合わせた。《エデン》は国内の治安維持に於ける最高機関であり、通常、彼等の家族や縁者の情報は厳重に守られている筈である。

成る程、《エデン》の人間の娘ならば、利用価値も高いだろう。しかもこの容姿だ、最悪使い道はいくらでもある。

そんな事の為にか弱い存在を追い詰める男達に、クロスは吐き気がした。

「だからか……」

「はい。その、――護衛の方々とも、逸れて仕舞って……」

「「……………」」

クロスとウィリアムは無言で視線を通わせた。護衛を付けられる、という事は、もしやそこそこ高官の娘だろうか。

「家にも戻れないし……お母様も、無事を祈る事しか――」

言いながら、途中で滲んだ涙を恥じるようにぐいと強く拭う仕草に、クロスは好感を持った。少なくとも、彼女は泣いても良い立場の筈だった。

「……うん」

暫し考えて、こっくりとクロスは頷いた。嫌な予感、というよりは数秒後に現実になる未来を思い浮かべて既に諦めた表情をしているウィリアムには構わず、にこりと少女に笑い掛ける。

「じゃあ、私達と来るか？ 一先ず、《エデン》に届ければ良いのだろ」

「えっ！」

ぱっと顔を上げた少女は、ぽかんと小さな口を開けてクロスを見上げた。

「で、で、でも、これ以上ご迷惑を……」

「構わないよ。――《エデン》本部は、確か王都だったな」

「うん」

確認するような視線に頷いて見せたウィリアムも、最早否やは無いようだった。

「どうせ、クロスは言い出しちゃったら絶対だから。それに、王都は――」

そこで唐突に、ウィリアムは口を噤んだ。いきなり押し黙った少年に不思議そうな顔をしたダリアが瞬く。

「でも、男二人で、旅をしているんでしょう？ どこかに行くんじゃ……」

「良いんだよ」

例に漏れず、彼女もクロスを男だと思っているらしい。一々訂正するのも馬鹿らしい上にウィリアムが怒るので、勘違いは指摘しないままでクロスはダリアの言葉を遮った。

「こう見えて、ウィリアムもそれなりに強いしな。それより何より、私は強い。君一人を守るくらい、造作も無いさ。それに――」

当然のように言い切った後、クロスはふと言葉を止め――うっそりと、笑った。

「青い蝶も、王都に向かっているようだし」



木造の、住居の中だった。

重い音ががらんとした室内に響く。

「ぐあっ」

叩き付けられた男の低い呻きを、せせら笑う人間がいる。彼を吹き飛ばした張本人、ジェスターだ。

「はっは、酷い悲鳴だねアハ！ ってかア、男の悲鳴ってなァんでこんな聞き苦しいかな！ しかも陳腐だしィ、ね、ナナちゃんそう思わない？」

「誰がナナちゃんか！」

今日も変わらず通常運転な二人だった。

無駄な遣り取りをしながらも、ナナトは後ろから近付いて来ていた男の左の膝を振り向きもしないまま左手の拳銃で撃ち抜いた。

悲鳴を上げて崩れ落ちる男の腹を容赦無く蹴り飛ばして意識を刈り取り、周囲を確認する。

倒れている男が六名。いずれも大柄な、そこそこに鍛えられた男達だ。全員きっちりと意識を失って沈んでいる。

「お見事！」

最後の一撃をのんびりと眺めていたジェスターが、神経を逆撫でる声で賞賛してぱちぱちと拍手した。案の定、ナナトのこめかみがひくりと震える。

咄嗟に引き金に掛かった指を、しかし彼は理性で抑えた。理由の八割は、無駄玉が勿体無いからだ。

「ありゃ」

鉛玉が飛んでくる事を想定していたのだろう、拍子抜けしたように首を傾げたジェスターに、ナナトは鼻を鳴らした。

「銃弾一発だって、ただではないんだぞ」

「そりゃまァ、そうだケドー」

詰まらなそうな表情でくるくると回転し始めたジェスターに、くらりと眩暈がする。

「――子供か、貴様ァ！」

「いつまでも子供の心を忘れない事は大切ですヨー……んもう、忘れちゃったのォ？ ワタシは君と同年同期の二十七歳だって！」

「二十七歳児の間違いだろう……」

左手で額を押さえて苦々しげに吐き捨てる。両手の拳銃を仕舞って男達を縛り上げ始めたナナトに、ジェスターは本当に子供のように頬を膨らませた。

「わあ、酷い扱い！ 折角オシゴト手伝って上げてるのにィーワタシは今日非番なんですヨーしかもワタシ情報部ですヨー？ 相方はどうしましたァ？ あ・い・か・た！ あ、もしかして逃げられちゃった？ 振られちゃった？ きゃ、カワイソー」

「……………」

ナナトは無言で愛銃を握った。ごつり、と頭に銃口を押し付けられる感触に、ジェスターはきやらきやらと笑う。

「いきなり撃ち出さない辺りがデレかな？ このツンデレさんめ！」

「よし、死ぬか？」

いつか誰かにも言われたような台詞を口にしながらにっこりとらしくない笑みを顔に貼り付けるナナトに構わず、ジェスターは眉を上げた。その瞳から、少しだけからかうような色が薄れる。

「……で？ 実際、相方は？ 作戦部は基本的に二人行動が原則デショ」

「……………ない」

「はい？」

苛立ちの為だろうか、ナナトはたった今縛り上げた最後の一人の頭を掴んで、床に叩き付けた――普通に八つ当たりである。

「……あらァ、カワイソ」

「いないんだ、相方」

ぼそり、と八割方本気で呟いたジェスターには気付かなかったのか、ナナトは噛み締めた歯の間から声を絞り出した。きょとんとジェスターが瞬く。

「何でまた」

「知らん。有無を言わず、という奴だな。おのれ……！」

思い出したのか忌々しげな顔をするナナトに、ジェスターが顔を引き攣らせた。

「可笑しいでショ、それ！ もう、また上官に喧嘩売ったりするから――」

「喧しい！ 変だと思った事を変だと言って何が悪い！」

「堅物！」

「上等だ馬鹿者！ 軟弱な貴様より何倍もマシだ！」

「誰が軟弱か……！」

言い返してはいるが、ナナトのその芯の通った部分は、ジェスターも評価している。直接の上官には嫌われもっと上の高官達には気に入られ、結局は良いように使われる――そう、だから『彼』のお目付け役を押し付けられたりするのだ。――尤もその点に関しては、自分も同じだったりするのだが。

『彼』を思い浮かべた流れで、ジェスターはふと思い出した。

「あ、そういえば知ってマス？」

そうしてぼんと出された名前に、ナナトが訝しげに首を傾げる。

「《ユリシーズ》？」

「そ。聞いた事あるでショー？ 強盗集団《ユリシーズ》――生憎、彼等が運んで来るのは幸運じゃァないけどネ」

「――が、王都に？」

相変わらず倒れ伏したままの男達を見回して、彼は深々と息を吐き出した。

また忙しくなりそうだ。

憂鬱になるナナトに、ジェスターが朗らかに追い打ちをかける。

「うん、だから、『彼』が乗り気で。アハー」

「はっ、それは――」

鼻で笑い飛ばそうとして失敗し、中途半端に顔を歪ませたまま、ナナトは器用にも息を飲んだ

。

「……………災難だな」

クロスという少年は、とダリアは彼を観察する。

刃めいた銀の髪は短く、長身を包むのは典型的な旅装で、動き易さを重視したものだ。腰に差した剣は直刀。線は細いが美貌に弱々しさは微塵も無く、何より硬い皮膚で覆われた手が、彼が守られる者ではない事を如実に表している。

旅の相方であるというウィリアムも、クロスと並んでいると圧倒的に弱そうに見えるが、身のこなしからそれなりの心得はあるのだろうと判る。立場上、ダリアは自身の観察眼に絶対の自信を持っている。

何より、とダリアは思う。

何より、このクロスという少年は。

「――ダリア？」

名前を呼ばれて、少女ははっと我に返ったようだった。無意味にじっとクロスを見上げていた瞳が光を宿す。

「どうしたんだ、ダリア。君みたいに愛らしい少女に見詰められては、私は照れて仕舞うよ」

極めて自然に、それが当たり前の事であるかのように、クロスは言った。ぱっとダリアの頬が赤らむ。

「もう、またそんな事を……あたしが恥ずかしいわ」

「おや、何故？ 私は本当の事を言っただけだろう？」

「それが恥ずかしいのよ、もう……」

可愛らしく頬を膨らませて、ダリアはふいと顔を背けた。

歩き続けながらも、絶世の美少年と天使のような美少女が戯れる様は、見知らぬ他人にとっても微笑ましく映るのだろう、先程から浴び続けている周囲の視線は、これ以上なく温かい。

一人だけ場違い感をひしひしと自覚しているウィリアムはといえば、二人に向かう視線と、それから序でにお前は一体何なんだ羨ましい代われ恨めしい呪われろといった類の視線に、健気に耐え続けていた。いつの時代もどの場所でも、美形というのはあらゆる意味で得なのである。

王都に向かう途中の町での事だった。ダリアの体力を考えれば、今日はここで宿を取った方が良さだろう。本人は気にしないだろうが、ウィリアムとしては、クロスを野宿させる訳にもいかない。

そろそろ路銀も無くなってきた頃だ、いっそここで数日を過ごして、幾らか稼いでおくのも手かも知れない、云々。

ウィリアムが一人で悶々と考えている間にも、クロスとダリアは周囲の反応など意にも介さず暢気な会話を続けている。

「――で？ 一体何を考えていたのかな？」

「あら、教える必要がありまして？」

態とらしく、ツンと尖らせたダリアの唇を人差し指でちょんとつついて、クロスはくつりと喉

の奥で笑った。

「是非、教えて欲しいね。君が私以外の事を考えていたなんて、うっかり嫉妬して仕舞いそうだし」

「……………！ もう！」

熟れた林檎のように頬を真っ赤に染めたダリアが、観念したように口を開いた。

「貴方の事を考えていたの！ 凄く、……格好良いし、とても強そうだし」

「実際強いよ——言っただろう？ 君の事は守るって」

「……その上恥ずかしいわ」

完全敗北したダリアは、がっくりと肩を落とした。赤くなっている彼女の耳に悪戯に触れているクロスを見て、あれは美形でなければ普通に犯罪だよな、とウィリアムは現実逃避気味に思った。因みに、美形であっても訴えられたら普通に負けるだろう。

暫くくすくすと笑っていたクロスは身を翻し、二人の一步前を歩き始めた。稀に彼女は、ウィリアムが眼を離した文字通り一瞬の間に姿を眩ませるといふ離れ業を披露する事がある。

過去の所業を思い出してつい警戒する相方には構わず、クロスはとある露天の店先に立っていた。いつの間にか、一つの髪飾りを手に持っている。

「ダリア！」

「クロス？」

名を呼ばれて首を傾げるダリアに、クロスはにっこりと髪飾りを差し出した。透明度の高い碧玉は、少女の金髪によく映える。

いくらなんでもあのワンピースは目立ち過ぎるという事で、彼女も今は質素な旅装に身を包んでいる。治安の悪い所では顔立ちを隠す為にフードを被ったりもしているが——やはり年頃の少女である以上は、着飾りたいというのが本音だろう。

自分も同じく『年頃の少女』であるという事をきっぱりと忘れ去っているクロスは、暫し少女と髪飾りを見比べた後、一人納得したように頷いた。

「うん、可愛い」

「え、あの……え？」

「お兄さん、これを一つ。こちらの天使に差し上げたくてね」

「おっ、何だ、可愛い彼女じゃねえか——」

調子の良い男と二、三会話し、結局元値の七割程度まで値段を引き下げさせたクロスは、二人が口を挟む暇もなくそれを購入して仕舞った。

「はい、どうぞ」

「クロス!? そんな、ただでさえお世話になっているのに——」

「構わないよ——そう、君と私が出会った記念に、という事で」

「クロス——」

呆れたように嘆息するウィリアムには、ちらりと舌を出して見せる。

「別に、良いじゃないか。どちらにせよ、そろそろ職は探さなければいけない頃だっただろ？」

「そうだけどね」

呆れは諦めに達した。クロスとウィリアムの間では、これが常態である。

一方、いきなり贈り物をされたダリアはといえば、困ったように、しかし少しだけ口元を綻ばせて髪飾りを大切そうに手に持っていた。やや持て余したような彼女に、クロスは再び笑いかける。

「つい、私の趣味で買って仕舞ったけれど。――お気に召したか？」

「……………ええ……」

碧玉をそろそろと撫でながら、ダリアは堪え切れなくなったように、ふわりと微笑んだ。それだけで場の雰囲気、ぱっと花が咲いたように明るいものになる。

「素敵――凄く、素敵だわ。有り難う、クロス」

「それは良かった。君が笑っていてくれれば、私も幸せだよ」

光を弾く刃に似た強い意志を宿す瞳は、笑うと一気に柔らかくなるのだ。

どう考えても恋人同士にしか見えない二人の遣り取りを何かを悟ったような表情で見ていたウィリアムは、ややあって、柔らかく苦笑した。

「仕様が無いなあ……」

結局の所、彼は幼馴染に甘いのがあった。

宿に泊まる時、クロスとウィリアムは基本的に同じ部屋だ。

仮にも年頃の男女が同じ部屋に寝るのはどうなのだとウィリアムは常々相方に進言しているのだが、生憎、今までその意見が通った事は無い。分けても無意味だろうの一言だ。男であるウィリアムとしては、泣くしかない所である。

ダリアと行動を共にするようになってからは、流石にクロスも部屋を二つ取ろうとしたのだが――因みに振り分けは、ウィリアムとクロスで同室、ダリア一人で一部屋だ――、これは、今のダリアによって拒否された。あんな事があった後で一人は嫌だと言われて仕舞えば、反論しようがない。

そんな経緯で、現在は三人同室で宿を取っていた。とある店の呼び込みの仕事をした後の事である。

夜は静かだった。町の中心地だからだろうか、虫の音も酷く遠い。

そんな中、寝入っていたウィリアムは、ふと眼を覚ました。

前触れもなく覚醒した所為か、思考が追い付くまでに時間が掛かった。呆然と安っぽい天井を見上げたまま、彼は暫し呆然とする。

「……？」

自分が何故目覚めたのか――そこまで思考が及んだ所で、漸く彼は、隣から聞こえる呻き声に気付いた。

隣に寝ているのはクロスだ。ゆっくりと身を起こし、幼馴染の少女の顔を覗き込む。その向こうに眠るダリアに、起きる気配はない。

「クロス……？」

整った顔を歪めて、額に汗を浮かべている少女に、ウィリアムが息を飲んだ。

「クロス!？」

一瞬、触れるのを躊躇い、それからそっと熟れた頬に指を滑らせる。予想通り、やや熱い。

「う……あ――」

「……クロス、――起きて、クロス」

暫し迷ってから、ウィリアムはそっとクロスの肩を叩いた。彼には慣れているとはいえ、元々気配には聡いクロスは、それだけで眼を覚ます。

力の無い瞳が、のろのろと薄闇を彷徨った。

「……ウィル？」

「クロス、大丈夫？ 魔されてたよ」

「――」

思考が追い付かないらしい。眼元に右腕を押し付けたまま動こうとしないクロスに、ウィリアムは一つ息を吐いた。

「ちょっと待ってて、水持ってくる」

立ち上がったウィリアムに、返事はない。

割り当てられた部屋のすぐ脇に、共同用の水道がある。そこに置いてあったグラスを一つ拝借して水を汲み、部屋に戻ると、漸くクロスは身を起こした所だった。

「クロス」

余計な刺激を与える事を厭うて、そっと声を掛ける。

「大丈夫？」

「……」

「――」

返らない答えに一人肩を竦め、少女の横にグラスを置く。

「はい、これ、水」

「……」

反応しないクロスにウィリアムは座り込むと、少女の硬い手にグラスを握らせた。そこまでしてやっと、クロスは水を口に含む。

一口、二口味気無い水を飲み、口の中が潤うと、クロスはほっと息を吐いた。それに、ウィリアムが少しだけ笑う。

「大丈夫？」

数度目の問いを口にしてから、くどかったかと彼が一人で眉を寄せていると、少女が不意に顔を上げた。伶俐な美貌から、既に頬の赤味は引いている。

「……ウィル？」

「うん」

呼び掛け、というよりは単に確認するように名を呼んだクロスに、ウィリアムは根気よく頷く。宥めるように触れた銀の髪は、小さな子供のもののようによく細くしなやかだ。

彼は少女から空になったグラスを受け取ると、それを枕元に置いた。未だに、横のダリアが起きる気配はない。馴れない旅の疲れが出たのか深く寝入っているようで、幼い少女を起こさなかった事にウィリアムは安堵した。

「どうかしたの？」

床に直に敷かれた布団から起き上がった体勢のままのクロスの横に再度腰を下ろして、ゆっくりとした口調で問いかけるウィリアムに、彼女はこっくりと幼い仕草で頷いた。

「夢、……見た」

「そう」

片言の台詞に、穏やかに頷く。頬を撫でる少年の掌に感じ入るように眼を伏せて、クロスは口の端を吊り上げた。

笑う。――自らを、嘲笑うように。

「はっ……」

「クロス――」

気遣うような視線を振り払うように、しかし確かにその存在を感じながら。

「我ながら、女々しい」

視界を侵すように彩る記憶の中の赤を、クロスは笑った。



ダリアの髪には、先日買った髪飾りが光っている。瞳と同色の碧玉は、金色の癖毛によく映えた。

それを眺めながら、知らずクロスの頬は緩んでいる。

「……気持ち悪いよ、クロス」

後ろから辟易とした声でウィリアムに進言されても、彼女は懲りなかった。

「何を言うか、ウィル！ 可愛らしいものを愛でて何が悪い!? ーだろ、ねえ、ダリア？」

「有り難う、クロス」

唐突に話題を振られたダリアは、動じる様子もなくにっこりと微笑んだ。いい加減クロスの言動にも慣れてきたらしい。

「可愛いよ、ダリア。天使と並べたら、哀れかな、天使が霞んで仕舞うね」

「クロスも格好良いわ。きっと、異性の方に人気でしょう？」

「さあ、どうかな。何にせよこの性格だから」

当人同士が気付いていないクロスとダリアの会話の中の微妙なズレに気付いているウィリアムはといえば、少しだけこめかみを搔いて、結局沈黙したままだ。

気負う様子もなく、軽い調子で肩を竦めた『少年』にダリアは少しだけ不思議そうな顔をしたが、クロスはそのまま町並みに視線を戻した。

髪飾りを買った町で数日滞在して路銀を稼ぎ、再び移動し始めてから二日目だ。先の町とは違い、木造の連なりの中にぽつりぽつりと赤い煉瓦造りの家がある。王都に近づく程、煉瓦の家の割合は増していくだろう。

「ダリア、今日は何が食べたい？」

ダリアと旅路を共にし始めてからというもの、クロスは常に年下の少女を主体に行動している。ウィリアムは基本的に決定権を相方に譲っているのだから、自然と行動はダリアを中心としたものになっていた。

下手に遠慮をすると逆効果だという事を既に学んでいる少女は、愛らしい仕草で首を傾げて口元に指を当てると、ぐるりと視線を巡らせた。

途中、珍しい色彩が眼に入った気がして、殆ど無意識に顔を戻す。

「どうかしたの、ダリア？」

少しだけ動きを止めたダリアに目敏く気付いたクロスがそう声を掛け、何を見ているのかと顔を上げてーそこで彼女は、凍り付いた。

「クロス、あたしサラダをークロス？」

気を取り直したダリアが言って長身の道連れを見上げ、そこで相手が硬直している事に驚いて声を上げる。

どうしたら良いか判らず、彼の相方を探した。ウィリアムは二人より少し離れた場所で、売られていた剣に気を取られているようだった。

その間、三秒も無かっただろう。その僅かの間に、クロスは駆け出していた。

「え、クロス!? ーウィリアム！」

急な事態に追い付けず、ダリアは悲鳴のような声で少年を呼んだ。弾かれたように振り返っ

たウィリアムが、駆け出したクロスの背中を驚いて見詰めている。

「どうしたの!？」

「判らないの、突然――」

「……ごめんね！」

「きゃあっ！」

既に脇道に入って見えなくなっているクロスに舌打ちすると、ウィリアムは一声掛けてダリアを持ち上げた。見た目に反して力のある腕が、小さな体を簡単に支える。

そのまま相方を追って同じように駆け出したウィリアムに、ダリアは慌ててしがみ付いた。

互いに、叫ぶような調子で言葉を交わす。

「何かあった!？」

「何も無いわ！ ああ、でも――」

直前に見た、珍しいもの。咄嗟に思い付いた事を口にする。

「青い髪の、女の人が――珍しいなと思って、ちょっと見ていたけれど」

ウィリアムは眉を寄せた。

「……それだね」

静かになった声音に、ダリアが苦労しながら顔を上げる。

「え？ 何が――」

「それは、確かに女の人？」

「え、ええ。後ろ姿で判り難かったけれど、間違いないわ」

「……成る程。有り難う」

事情を正確に把握した少年は、一つ溜め息を吐くと少女を抱え直して走る速度を上げた。こんな状況にも関わらず、ダリアはつい関心して仕舞う。

「……力、あるのね」

「そりゃ、毎日クロスの剣に付き合ってるからね――と」

クロスを追って入り込んだ小路の向こうは、林に近い場所だった。少ない店も時間帯が悪いのか潰れた後なのか、全て閉まっている。

そんな中に青と銀を見付けて、ウィリアムは安い剣の柄を握った。

「や、止め――」

「追い付いた、――！」

憎悪と怨嗟と呪詛を籠めて名前を吐き出すと、クロスは飛び掛かった勢いのままに相手に斬り捨てようとする。

相手が咄嗟に手の中の荷物を投げ付けた事で、一瞬クロスの動きが鈍る――それが良かったのだろう、ぎりぎり、クロスの剣の下にウィリアムの剣が滑り込んだ。

「くっ……！」

無理な体勢できつい一撃を受け止めて、びりびりと腕が痺れる。その痛みにウィリアムは顔を歪め、しかしそのままクロスの剣を弾き飛ばした。

「ウィル!？ 君、何を――」

ウィリアムが割り込んだ事が余程予想外だったのか、剣はあっさりとクロスの手から離れて落

ちた。

互いの荒い息遣いが、しんとした場に落ちる。様々な要因で煩い自分の鼓動を聞きながら、ウィリアムはたった今殺されそうになっていた相手を背後に庇ってクロスを見詰めた。

「何で——何で、何で、何で、何でお前が、何を」

「クロス、クロス、落ち着いて！ ——この人、女の人だよ」

殺意に眼が眩んでそんな事にも気付かなかったのだろうか——走り込んでくる途中にも、ウィリアムはそれが青い髪の女性である事を確認していた。

その彼女を、ウィリアムに運ばれて来たダリアが必死に宥めている。

呆然と、クロスはそれを見下ろしていた。

「違、う——違う？ 違った？」

「そう」

舌足らずな子供のように繰り返すクロスに、ウィリアムは強く頷いた。

「……あ」

へた、とクロスが腰を抜かしたように座り込む。はくはくと、無意味に口を動かしてから、クロスは結局、意味を為さない音を吐き出した。

彼女が落ち着いた事を確信したウィリアムも、肺を空にする勢いで息を吐き出す。

「あの——」

二人が自失している間に、ダリアが話を付けたらしかった。怯えたように、それでも最初よりは落ち着いてこちらを見詰める女を、クロスは呆然と見返す。

青い髪。

砂色の、女物の洋服。下はスカートだ。

たった今斬り殺そうとした年若い女性に、クロスは緩く首を振った。

「済まない——済まない、人違いだ」

「いえ……」

この場から離れたい、というのが本音だったのだろう。女性は相変わらず怯えた声でそれだけ言うと、そそくさと逃げ出して仕舞った。無論、残された三人がそれを引き留める事はない。

「……この町は、さっさと出た方が良いね」

へたり込んだままのクロスの髪を撫で付けながら、ウィリアムは努めて冷静な声でそれだけを言った。

頷いたダリアは、クロスをそっと抱き締める。

「大丈夫……？」

「ごめん、……ごめん、悪い、悪かった」

「それはさっきの女の人に言うべきだね——今更だけど。立てる？ 行こう、クロス」

差し出された手にのろのろと伸ばされたクロスの細い手を掴んで、ウィリアムは一息に軽い体を引き上げた。

「ウィリアム……」

「平気だよ。——さ、行こう」

僅かに震えている体を、先程のダリアと同じようにぎゅっと抱き締めながら、ウィリアムはそう言った。

結局、その日は野宿になった。クロスとウィリアムが、町から出る事を最優先にした為だ。クロスはダリアに平謝りしたし、ウィリアムはクロスを野宿させる事に苦い顔をしたが、それ以外に手が無かったのだから仕方が無い。

流石に、日の暮れた山の中を歩き回る無謀さは、二人とも持ち合わせていない。次の町までに山がある事は予想外で、せめて訊いておけば良かったね、とウィリアムは苦笑していたが。

山の中だという事もあって、夜は酷く冷えるので身を清めるのは流石に厳しい。せめて手足と顔だけでも、とクロスが偶然見付けた湖に足を浸していると、不意に気配を感じて彼女は振り返った。

「ダリア？」

その姿を認めて、クロスは驚いて声を上げた。いくら寝床とした場所から近いといっても、彼女一人で暗い中を歩いて来たのか。

「ウィルは何を――」

「違うの、ごめんなさい。うとうとしていたから、こっそり抜け出して来ちゃったわ」

どちらにせよ、この危険な中を、非力な少女一人にしたという事か。クロスは正直に眉を寄せた。

山賊にでも出くわしたら、どうする心算だったのか。

「.....不甲斐無い相方で申し訳無い」

「疲れていたのよ」

「――」

今日ウィリアムを疲れさせたのはクロスだ。あの後も散々自分を気遣い続けた幼馴染を思い浮かべて、クロスは顔を伏せた。相手が何を考えているか気付いたのか、ダリアが慌てて声を上げる。

「違――ウィリアムは気にしてないわ！」

「だろうね」

それにはクロスも頷いた。

「あれは昔から、私にくっついてばかりだったよ。――私は、迷惑しか掛けていなかったのに」

「.....ねえ」

クロスの隣に座り込み、靴を脱いで、ダリアも湖に足を浸した。自然に湧き出した水は、考えていたよりも冷たくない。寧ろ、今こうしている山の夜気の方が、遥かに肌を刺すのだ。

長身の剣士の顔を覗き込んで、少女は首を傾けた。

「そう言えば、何で貴方達が旅をしているのか、聞いていなかったわ」

「.....その質問は」

ゆら、と悪戯に足を揺らして、クロスは水面を見詰めたまま動かない。

「今日の事があったから？」

「いいえ、思い出しただけ」

「.....そう」

淡々と会話をする二人の声に、感情は入っていなかった。夜は鳥も寝ている。聞こえるのは

虫と、山の蛙の声だけだ。

「簡単に言えば」

静かな空気を裂いて、クロスはふっと笑った――自分を、笑うように。

「復讐、かな。下らないだろう？」

「……………」

ダリアは何も言わなかった。ただ無言で、続きを促している。

それを受けて、クロスは続けた。

感情の無い、声で。

「私とウィルは、小さな村の出身でね――笑って仕舞うくらい、簡単だったよ。たった一人の男に、何もかも奪われた。親も友人も居場所も、何もかも、殺されて奪われて、最後は燃やされた。年寄りか、置き去りにされた小さな子供ばかりが集まったような村だったから、さぞ殺し易かっただろうな――そう、私と、それにウィルの剣の師は私の父親なんだけれどもね、母親を庇うような形で、背中を斬られていた。ほんの、そう――私が水を汲んで、戻って来るまでの間だから、ほんの数時間の事だね。ウィルはその時、親の言い付けで隣の町に買い物に行っていたんだけど」

そこまで言って、クロスは笑い出した。

そう、本当に――笑って仕舞うくらい簡単に、クロスの全ては奪われたのだ。

あっさりと。

あの、青い髪の男に。

今でも脳裏に焼き付いている、あの赤い夜に。

「……そう」

ダリアは、ただそれだけを口にして、沈黙した。同情も憐憫も、彼女の瞳にはなかった。

その事に拍子抜けして、それからクロスは安堵した。何故だかそれだけで体の力が抜けて漸く、ああ自分は緊張していたのかと、気付く。

「復讐、なんてね。何の意味も無い。知っている。判っているさ」

「ええ……」

クロスと同じように水面に視線を落として、ダリアは頷いた。

「でしょうね。だから、あたしは何も言わないわ」

でも、と彼女は首を傾げる。何も知らない、無垢な子供のように。或いは全てを悟り切った大人の表情で。

「でも、それが終わったらどうするの？」

「……………さあね」

そんな事、考えた事も無かった。だからクロスは、正直にそう答えた。

未来。自分の、未来。どこかに置き忘れた言葉だった。

クロスの返答に、ダリアは何も言わなかった。止める言葉も無く、諭そうとする気配も無く、しかし否定も拒絶もする事なく、少女はただ沈黙している。

何故だろう――自分よりも年下の、線の細い、美しい少女だ。彼女から感じられる確かな芯の強さに、クロスは苦笑した。

クロスは弱い。それを、確かに自覚している。

その弱さを静かに受け止める少女の姿に訳も判らぬまま酷く安堵して、クロスは自分の膝を抱えて、声を殺して泣いた。

頭から熱いシャワーを浴びて、クロスはほっと息を吐いた。王都に近い市では、水道設備も随分と整っている。故郷とは雲泥の差なのだ。

それでも、と彼女は思う。

戻れるものならば、自分は戻るだろう。あの、不便で同年代の人間なんて殆どいなかったが、それでも温かかった場所へ。

戻る場所なんて、失くして仕舞ったけれど。

シャワーを止めて髪から水滴を搾る。小さな頃は長くしていた時期もあったが、短い方が何かと便利なのだ。

そう、ぱっさりと切った髪を誰よりも惜しんでいたのは、ウィリアムだった——今も本音を言えば伸ばして欲しいのかも知れない。彼女に男装するように言ったのは、他でもない彼女なのだが。

そのままぱたぱたと手で自分を仰いで体から熱気を逃がしていると、扉の向こうに気配を感じた。

カタン、と小さな音がする。

ウィリアムは今、寝室で寝ている——クロスは特に深く考える事もせず、足下に置いてあった短剣に手を伸ばした。

「きゃあ!？」

振り返りざまに首筋に刃先を突きつける。思いがけず無防備な相手にクロスはきょとんと瞬き、それからそれが小柄な少女である事に気付いて慌てて得物を引いた。

「——と、済まない、ダリア」

「い、いいえ、こちらこそごめんなさい、クロス。入っているなんて、気付かなくて——」

普段は桃色の頬を熟れた林檎の色に染めながらぱっと視線を逸らしたダリアは、それから何かに気付いたようにそろそろと視線を戻した。

「……え？」

くっと整った眉が寄る——既に頬の赤みは引いている。その反応にクロスは首を傾げ、それから自分が現在服を着ていないという事と、普段は男装であるという事を思い出した。

「……………あ」

「——お、女の方……!？」

驚愕して声を上げるダリアに困ったように頬を搔いて、取り敢えずと彼女は口を開いた。

「あの、タオルをくれないかな」

「あ、え、ええ、はい、どうぞ」

しどろもどろになりながら渡された大きめのタオルで体の水気を拭き取りながら、クロスは苦笑した。

「いや、その——旅は危険だからと、ウィルがね」

「ああ——そうなの。ふう、驚いた……」

まだどきどきと煩いのか、ダリアは胸の辺りを小さな手で強く押さえながら大きく息を吐き出す。



肌触りの悪いタオルで体を覆うと、クロスは護身用の短剣を鞘に戻しながらダリアの隣に並んだ。まだ信じられないのか、まじまじとこちらを見上げてくる少女に、困ったように眉尻を上げる。

「……そう見詰められると、流石に恥ずかしいよ。特に相手が、君みたいに可愛らしいお嬢さんなら、尚更ね」

「……………あら、そう——」

常と変わりなく滑らかに吐き出されたクロスの言葉に、ダリアは色々と察したらしく一気に脱力した。そのまま部屋に戻ろうとする相手に、驚いて飛び付く。

「ちょっと、クロス!？」

「ああ、ダリア。別に君を信用していなかったとかではなくてね——そう、タイミングを逃してただけで。気分を悪くさせて仕舞ったら濟まない。それから関係無い事だが、飛び付くと危ないよ。刃が出ていないとはいえ私は刃物を持っているのだからね。君の柔肌に傷でも付いたら、私は自分を恨んでも恨み切れない」

「ちょ、ちょ、今はそういう話はいいいから——何故そのまま脱衣所を出ようとするの!？」

「いや、着替えを忘れたんだ」

呂律が怪しくなる程慌てているダリアに対して、クロスはどこまでも堂々としていた。女だろうと何だろうと、男より男らしいのは変わらないらしい。

全体的にほっそりとした長身には、無駄な贅肉なぞ一切無い。あちこちに残っている小さな傷は、彼女の魅力を損なうものにはなり得なかった。

女としては少々寂しいかも知れないが、それでも惚れ惚れとせずにはいられない肢体を惜し気もなく晒しているクロスに、ダリアは再度顔を赤らめて相手に抱き付いたまま俯いた。

「は、反則よ……！ 反則だわ、女の子なのにそんなに格好良いなんて！ 強いし優しいし男前なもの！ 狡いわ！」

「それは、有り難う」

ふわふわとした金色の髪をゆっくりと梳きながら、クロスは悪戯っぽく片目を瞑った。

「恋しちゃった？」

「……！」

馬鹿、と叫ぼうとしたのだろうダリアは、暫く口をぱくぱくと開閉させると、態とらしくつんと顔を背けた。

「そうかも。責任取ってくれるの？」

「勿論、お嬢さん」

「なんて会話してるの、二人とも……」

二人の会話に、ウィリアムの声が割り込んだ。二人同時に部屋へ向かう扉に視線を向ける。

「ウィル、起きたのか？」

「あれだけ騒がればね！ ——ってか、今まで知られていなかった事の方に吃驚したけど」

「いや、普通に言うのを忘れていたな」

扉越しの声に返しながら、当然のようにそちらへと向かおうとするクロスに、ダリアはまたしがみ付いた——扉の向こうの攻防を読んだかのように、ウィリアムが溜め息を吐く気配がする。

「クロス、お願いだからまたタオル一枚で歩き回るとかは止めてね。何を忘れたの？」

「着替えだ」

「わぁ致命的！ ちょっと待ってて、出て来ちゃ駄目だよ！」

ぱたぱたと、扉から離れる音がする。ほっとして息を吐き出したダリアと、彼女を見下ろしたクロスの視線が重なった。

同時に、瞬く。

「……よろしく、ダリア」

「よろしくね、クロス」

少女達は言い合って、それから笑った。

深夜。

夜というのは、酷く鮮やかだ。それを、クロスは最近知った。

楽しそうに光を見ている彼女を漸く寝かしつけて、それにくっ付いていた少女も一緒に眠らせて、ほっと一息吐いたウィリアムがやっと布団に入って、少し。

静寂を唐突に破った大声に、三人は跳ね起きた。

「な、な、なん」

寝惚けた顔のウィリアムが、慌てて立ち上がろうとして見事に素っ転ぶ。

「痛ッ！ なな何事!? 落ち着いてクロス！」

「いや、ウィル、君が落ち着け——というか、私とダリアを潰す気か？ 迂闊に動いてしかも転ぶな！」

「ごめんなさい！」

尤もな事を言われて、ウィリアムが硬直する。その間に起き出したダリアが、暗い中で探し当てた電灯を点けた。

「ああ、有り難うダリア。うちの相棒が役に立たなくて済まない」

寝起きも絶好調な甘い声音で礼を言われて、ダリアはにっこりと笑う。それからまた聞こえてきた怒声にその笑みを強張らせた。

「な、何かしら……」

「……うん。何にせよ」

ことり、と見た目にそぐわぬ幼い仕草で首を傾げて、クロスは立ち上がった。枕元に置いてあった直刀の剣を手にする。

僅かに震えているダリアの白い手に恭しく唇を寄せながら、少女はくつりと喉を鳴らした。

「ダリアを怯えさせた事は、明確な罪だね」

「クロス……」

抱き締められてほっと体の力を抜く年下の少女の頭を、クロスは安心させるようにゆっくりとした仕草で撫でた。

「全く、——こんな半端な時間に起きていては、折角の綺麗な肌が荒れて仕舞うよ、ダリア。君の前では白魚だって逃げ出すだろうに」

落ち着きを取り戻したダリアを相棒に預けて無駄のない動きで扉に向かうクロスに、少女を託されたウィリアムが眉を跳ね上げる。

「待って、僕が行くよ。——もう、一応クロスは女の子なのに！」

「敷布に足を取られる男が、何を言う」

「それは言わないでって——」

もごもごと口の中で反論するウィリアムをきっぱりと無視してクロスが開けようとした扉が、外側から音を立てて開かれた。

「「！」」

クロスが飛び退いて剣を抜き、ウィリアムが手の中でかちゃりと音を立てる——飛び込んできた女の顔には見覚えがあった。

すぐに警戒を解いた二人の姿に、女一宿の女主人は驚いた顔をしたが、それどころではないのか大した反応も示さずに、さっと扉とは逆側の窓を開けた。

「あの……？」

声を掛けようとして名前を知らない事に気付き、中途半端に言葉を止めるウィリアムを一正確にはウィリアムにくっ付いているダリアを一別して、彼女は急いた口調で言い放った。

「お前達、窓からお逃げ！ 今、主人が奴等を止めてるから――」

「待て、何の話だ。何が起きているんです？」

声を上げたクロスの体をぐいぐいと窓の方へと押し遣りながら、女は首を振った。

「金髪碧眼の女の子がいないかって――この娘の事だろう？ あんた達が何者かは知らないけど悪い奴等にゃ見えないし、言われるがまま客を差し出すのも癪な話さ――さ、良いからお逃げ！

」

「「……………」」

クロスはちらりと視線を滑らせた。ウィリアムと眼が合う。ダリアの素性を知って狙う者か、それとも――。

「……いや、ダリアの護衛が追い付いた、という可能性もあるか」

様子からその可能性の低さを察しながらも、クロスは敢えて口にした。慌てている女の肩を押しさえて、言い含めるように顔を覗き込む。

「失礼、女史。勇ましく賢明な貴女に、少々質問をしても宜しいだろうか？ ――相手は、どんな様子でしたか？」

「さてね、いきなり数人で押し寄せて来たかと思えば暴れ回って少女を出せと――そうだ、一人特徴的な、そう……青い髪の男がいたかな。ああもう、のんびりしておいででないよ、坊や達！

」

瞬間。

「――」

ぴたり、と。

クロスの動きが止まった――同時、造作自体は鋭いながらも常に柔らかい表情を浮かべている筈の美貌から、感情という感情が抜け落ちる。

完全に色を失ったウィリアムとダリアを強い視線で一瞥して、クロスは再度剣を引き抜くと走り出した――たった今女が入って来た、扉へと。

「「クロス！」」

「どこに行くんだい!？」

「ウィル、ダリア、先に行け！」

道連れ二人の悲鳴を黙殺して吐き捨てた少女の姿は、既に部屋の中から消えていた。

覚えている。

女好きするだろう、精悍な顔立ち。

覚えている。

剣を握る、鍛えられた腕も。そこに彫られた青い蝶の刺青も。

覚えている。

何より眼に付く、あの青い髪を。

「――パール！」

クロスは吼えた。ちょうど、あの日、あの夜と同じように。

飛び込んだ室内は、女主人がいた時よりも確実に悪化していただろう。数人の男女が倒れている。彼等の一人一人の息を確かめながら、彼女は眉を寄せた。

「……緩い」

全員生きている。あの男にしては、手緩くはないか。

「何だ……？」

しかし、その思考は、視界に入った男の姿に瞬時に意味を失った。

速やかに、脳が余計な一切を排除する。

半ば無意識の内に、クロスは呼吸を整えた。――眼の前で、飛び込んで来た自分を嘲笑うように顔を歪める、青い髪の男に。

会ったのはたった一度きり。半年近く前の話だ。あの日の出来事を、思い出さなかった日はない。

自分の感覚が急激に加速するのを感じながら、少女は、――いっそ恋い焦がれるように微笑んだ。

「ああ、……久し振りだね」

「おう、久し振り」

男も答えて笑った。まるで、仲の良い旧友にでも会ったかのように。

「あのガキ連れてんのが銀髪の男だって聞いて、まさかとは思っちゃいたが――お前だったか、女」

刀身の長い剣を軽く振りながら、男は優しく言った。

「態々手間を掛けた甲斐があるってもんだぜ。なあ、全員生かしてやってる。お前が動けなくなったら、一人一人捌り殺しにしてやるよ。親切な男だろ？」

「――――」

ふ、と。

クロスが、息を吐き出した。

美貌から、微笑が落ちる。

少女の足に、ぐっと力が籠もる。

剣の柄を握る手が、力の入り過ぎで白くなった。

踏み込む。

「パール――！」

それまでの静かさが何かの冗談のように、クロスは叫びながらパールへと斬り掛かった。

体重を乗せた一撃を、パールは受け止める事無く綺麗に流す。

返す刃で振り下ろされた剣を、振り返りざまクロスは受け止めた。

「ガキを出しな、女！」

「戯言を！」

身を傾けて剣を流し、左手を床に突いて足払いを仕掛ける。一步引いてそれを避け、パールが剣を握り直した。

「……速いな」

「それはどう——も！」

低い体勢のまま、大きく踏み込む。下から斜めに斬り掛かった一撃は、男が後ろへと身を反らせた事で避けられた。

「はあ——！」

「——つとに、物騒なガキだな！」

甲高い音を立てて、刃と刃が火花を散らす。そのまま鏝迫り合いになりそうな雰囲気、クロスは内心舌打ちした——力比べでは、当然不利だ。

「——！」

早々に相手の剣を弾いて身を引こうとした少女の瞳が、金の煌めきを捉えて凍り付いた。

「……んん？」

クロスの動揺に気付いたパールが振り返る。絶好の機会だったが、彼女は斬り掛かれなかった。

「ダリア！ 馬鹿、来るな——」

「馬鹿は誰!? 貴女も逃げるのよ！」

部屋に飛び込んで来た小さな少女の姿に、クロスが悲鳴を上げる。それを認めて、パールが眼を細めた。

「——へえ？」

「ちっ……！」

楽しげな様子を隠さない男とダリアの間に割り込んで、クロスが舌打ちする。背中に庇った少女はぐいと強い力でクロスの服を引いた。

「クロス、逃げるの！」

「ふざけるな、逃げるか、誰が——！」

「それに」

会話に割り込みながら、パールが踏み込んだ。重い一撃をやむなく受け止めながら、クロスは歯噛みする。

うっそりと、男が笑った。

「俺が逃がしてやるとも思わない方がよいぜ、馬鹿なお嬢ちゃん」

「黙りなさい、無礼者！」

常に無く厳しい口調でダリアが言った直後、場に破裂音が響いた。突然の事に、三人の動きが止まる。

「何――」

「銃声!？」

少なくとも、男の仲間ではないらしい。その僅かな空隙に、ウィリアムの声が割り込んだ。

「ごめん、クロス！」

追いついてきた少年が、少女に当て身を食らわせる。倒れそうになる細い体を受け止めて、彼は即座に身を翻した。

男と少年の視線が絡む。

逃げ出したウィリアムとダリアを、迂闊に動くべきではないと判断したのだろう、パールは追おうとはしなかった。

数人の男女が倒れる宿の中に、二つの影が飛び込んだ。

片方の男が両手に持った拳銃を構えて危険が無い事を確認すると、倒れている一人の男の横に膝を落とす。

首筋に手を当てて鼓動を確認すると、彼——ナナトはほっと息を吐き出した。何故か付いて来たジェスターが他の人間に声を掛けていているのを見て、複雑そうに片眼を眇める。

「なあ、訊いて良いか」

「ハイハイ、何でショー？ ああ、全員生きてるネ」

手早く応急処置に入る男と同じように手を動かしながら、ナナトは頭を抱えたいくなる衝動を必死に堪えた。

「な、ん、で！ 貴様がここにいるんだ情報部だろう！」

「助かるでショ？」

「ああ、いや正直助かるんだが……」

不味い、論点をずらされる気がする。流されそうになる自分を、彼は叱咤した。

「それとこれとは話が——」

「珍しくいた君の相方は逃げ出したあの男追って行っちゃったシィ。アハハ、逃げ足速い速い」

「——！」

限界だった。ナナトは確かに優秀な人間であったがしかし、それ以上に——基本的に、彼の沸点は低い。

「貴様がちんたらしているから逃げられたんだろうが阿呆！」

「いや、それワタシの所為じゃないってエ。あの新人クンってば動き遅過ぎない？ ナナちゃん、——死ぬよ、あれ」

「誰がナナちゃんか！」

「……いい加減飽きないの？ それ」

生憎、諦めてそのふざけた呼称を受け入れる気はまだ起きないのである。

きっちり言い返しながらも、ナナトはジェスターの言葉を否定しなかった。今回相棒になった作戦部の新人は、恐らく《ユリシーズ》の頭目を逃がすだろうと思いつつながら。

「それにィ、この前非番だったワタシを引っ張り出したのは君でショー？ もう、自分の事を棚に上げるなんて《エデン》構成員の風上にも置けないなァ、ポンポン」

「貴様は死ぬ一回死ぬ今すぐ死ぬ！」

下らない言い合いをしながらもジェスターの手は正確に動き、ナナトの視線は鋭く状況を確認している。

殆どが一方向的に斬り付けられたのだろう。外側にいた他の《ユリシーズ》の連中にかかずにいる間に、肝心のパールは姿を消していた。

男が一人、女が二人。服装からして、恐らくは皆が宿の従業員だろう。これで全員だろうか——客はいなかったのだろうか。

宿の奥に気配は無いようだが、ナナトは念の為に銃を構え直す。

その様子を見ていたジェスターが、野次を飛ばすように真っ直ぐな背中に声を掛けた。



「――ってかァ、ナナちゃんいつも怒鳴ってて疲れない？」

「喧しい誰の所為だ！　そして貴様は仕事に戻れ」

「フフン、……何を隠そう、暇なんです、ヨ！　『彼』がどっかに遊びに行っちゃったからネ！

」

「……………」

ナナトは振り返った。二度、三度瞬いて、ことりと首を傾げる。

「――はぁ……？」

怪訝げな顔の同僚にジェスターがひょいと肩を竦めていると、不意に彼の足下にいた女性が呻いた。

「うん……」

「オヤ」

眼を開けて、まだ茫然としている女性の体を、ジェスターがゆっくりと抱き起こす。

「な、に……？」

「ご無事ですか、お嬢さん」

掛けた声は、至極優しい。下手な刺激をしないように、ナナトはそれを黙して見守った。

「な、に――何……？　男、さっきの男は――」

「もう大丈夫ですよ。到着が遅れまして申し訳御座いません、わたくし、《エデン》情報部所属、ジェスターという者です」

「《エデン》、――《エデン》？」

女の瞳が、光を取り戻した。普通、情報部が現場にいる筈がないのだが、恐らく気付いてはいないだろう。

「今、《エデン》って言ったの？　私、助かった……？　そうだ、皆は!？」

「彼等も無事ですよ。貴女は頭を強く打ち付けているようですね、すぐに医療機関を手配致します」

「私は良いの、皆が……そう、ここの主人は？」

「主人？」

ジェスターとナナトはそっと視線を交わした。まだ気を失ったままの男がそうかと思っていたのだが、違うのだろうか。

「その方は、どちらに――」

「私だよ」

奥から声がした。驚いて、同時に振り返る。

中肉中背の女性が、扉の前に仁王立ちしていた。見知らぬ男二人を、強い視線で見据えている

。

「どちらさん？　《エデン》って言った？」

「はい。情報部のジェスターと申します。こちらは――」

「作戦部のナナトです。ご必要なら、後程照会を。直通コードをお教えしましょう」

「……いや、平気だよ。有り難う」

名乗ると、一先ずは信用したらしい。彼女は纏め上げられた髪をぐしゃぐしゃと乱すと、大き

く息を吐き出した。

「全く、私とした事が——情けない、客の子達に逃げるように言って、気を失っちゃったらしい。たった今気付いたよ。全員無事かい？」

「四人で全てですか？」

「そう。私と夫、それとそこの——」

顔を確認して、ほっとしたように眼を和ませる。

「二人だ。良かった……」

安堵して座り込む女性を気遣うようにその背に手を当てながら、ナナトはちらりと奥に視線を向けた。

「客がいたのか」

「そう、一組だけね。男の子が二人、それよりちょっと小さい女の子が一人。ちゃんと逃げ切れたみたいだね、背の高い方が飛び出した時はどうしようかと思ったけど——そう、押し入ってきた青い男、あの女の子を探してたみたいだった」

「「——」」

思い掛けない情報に、ジェスターとナナトは顔を見合わせた。

宿の入り口付近に気配。恐らくはあの新人が失敗報告をしてくるのだろう。

無駄な脱力感を味わいながら、二人は内心呟いた——無論、決して声になど出さなかったが。仕事増えたな、と。

夜の闇を、二人は駆ける。

「はぁ……！」

ウィリアムの前を走っていたダリアが、疲労の為か足を纏れさせた。

「きゃっ……」

「おっと——大丈夫？」

倒れ掛かったダリアを、ウィリアムが左手で支える。右腕には、気を失ったクロスを抱えたまままだ。

「え、ええ、有り難う」

「そろそろ平気かな……」

既に大分走っている。ウィリアムは足を緩めると、そろりと後ろを振り返った。

市街の中央から遠ざかった、辺鄙な場所だ。今日はこのまま場所を移動するしかないだろう。

「大丈夫だったかな……言われるまま、逃げて来ちゃったけど」

「さっきの銃声——何だったのかしら。でも、彼等はあたしが狙いだったのでしょうか？」

「ああ、そう言ってたね」

完全に足を止め、クロスを抱え直しながら頷いたウィリアムは、俯いた少女の指先が微かに震えている事に気付いた。

「ダリア……」

落ち着かせるように肩を撫でる。そのまま握り込んだのは、冷たく凍えていた。

無言のまま、ウィリアムが思案する様子を見せる。街に戻るのは論外だが、このままの状態でも移動を続けて良いものだろうか。

既に、どこの宿屋も閉まっている時間だろう。そもそも、近くには一件の建物もないのだ。

考え込む少年に、ダリアは慌てて首を振った。

「ごめんね、ごめんなさい、ウィリアム。あたしは平気よ」

「そんな事言っても——」

「大丈夫」

自分に言い聞かせるようにそう言って、彼女は青い顔のまま微笑んだ。

「このままここにいるのも危険よ、行きましょう。——幸い、クロスにも怪我は無いのだし」

「……………そうだね」

渋い顔を隠そうともせず、ウィリアムは頷いた。それに苦笑したダリアが、率先して歩き出そうとする。

その時、ウィリアムに抱え上げられていたクロスが小さく呻いた。

「ん……」

「クロス！」

「クロス、起きた？」

ダリアが声を上げ、ウィリアムが優しく呼び掛ける。二人の見守る中、クロスはゆっくりと眼を開け——そのまま、呆然としているようだった。

ウィリアムが、抱え上げていた細い体をそっと下ろす。少しふら付いて、彼女はぺたりと座り

込んだ。

「起きた、クロス？」

穏やかな口調で、少年は再度問い掛けた――その声に反応して、クロスはのろのろと顔を上げる。

二度、三度瞬く。

「ウィリアム――」

眼の前のものを、確認するように。

「ダリア……？」

それから頭痛を堪えるように頭を抱えて、唐突に。

クロスの瞳に、炎が宿った。

「――あの男、パール！」

「ごめんね、クロス」

吼えて、弾かれたように立ち上がるクロスの足を、ウィリアムが予想していたように冷静に掬い上げた。

「なっ……！」

こちらは完全に予想外だったクロスが、見事にバランスを崩す。彼女が頭を打たないように適度に体を支えてやったウィリアムを、少女はぎっと睨み付けた。

「何をする、ウィル！　そもそも――」

立ち上がってがっとな少年の胸倉を掴み、勢いよく引き寄せる。ウィリアムは苦しげに眉を顰めたが、何も言わなかった。

少女の瞳の奥に、昏い炎が揺れている。

「何故止めた、貴様！」

「当たり前よ！」

激昂するクロスに、それ以上の迫力で返したのはダリアだった。

クロスとウィリアムの間に割り込み、碧眼で年上の少女を睨み上げる。

「何をしているの、あんな――死にに行くような真似を！」

「君に何が判る、ダリア？」

流石に怒鳴りはしなかったが、それでも常とは違い吐き捨てるような口調で問うたクロスに、しかしダリアが怯む様子は無かった。

「生きている人間なら、それらしく前を向きなさい、クロス！」

「黙れよ、お嬢さん」

「いいえ、黙らないわ。確かに貴女の気持ちを判ってあげる事は出来ないけれどね、それでも貴女のしている事が馬鹿だというのは理解出来るわよ！」

「煩い！　私がどうなろうが関係無いだろう！」

叫んだクロスは、そこではっと我に返った。眼の前で泣きそうな顔をしているダリアに気付いて眼を見開く。

青い顔をしている相棒の少女に、ウィリアムがそっと溜め息を吐いた。

「クロス――それ、本気で言ってる？」

いつもと変わらぬ穏やかなものでありながら確かな怒りの籠もった言葉に、クロスは叱られた子供のように肩を震わせた。

短い髪を右手で掻き乱して、その場に膝を抱えて座り込む。

「ウィル、ダリア……違う、違うんだ、言い過ぎた、済まない」

「……………クロス——」

ふるふると弱々しく頭を振る、迷子の子供のような少女を、ダリアは小さな体でそっと抱き締めめた。

「クロス、クロス。あたしはクロスが大好きよ」

「ああ……私も好きだよ、ダリア」

「ねえ、だったら判ってよ、あたし達の気持ちも。どんなに時間を掛けても、構わないから」

「うん……うん。悪い、済まなかった」

クロスが、ゆっくりと眼を伏せる。

あの時の記憶は、一生忘れられないだろう。

憎しみを消し去る事だって、とてもとても難しい。

「知っているわ。だから、あたし達の事を忘れないで。辛かった記憶だって、忘れなくても良いから。それを胸に抱いて、生きていっても良いから、だから——」

それ以上は言葉にならなかったのだろう、泣き出して仕舞った少女を強く抱き締め返して、クロスも相手の肩口に顔を埋めた。

抱き合ったまま泣き始める二人にウィリアムはそっと息を吐く。それから苦笑して、銀の髪を優しく撫でた。

それから数日は、平穏な日が続いていた。

一階では飲み屋をやっている、宿屋での事である。

「コール」

今日知り合ったばかりの男達を相手に、ウィリアムはにっこりと微笑んでカードを広げた。気弱げな少年が見せた手札に、その場がどよめく。

「強いな、あんた！」

「仕方ねえ、持って行け！」

「有り難う御座います」

「何をしているんだ……」

にこやかな表情のまま戦利品の酒瓶を受け取ったウィリアムの背中に、気力を根こそぎ奪われたような少女の声が掛けられた。少年は振り返ると、きょとりと首を傾げる。

雀斑面が、ぱっと明るくなった。

「あれ、クロス？」

「『あれ』じゃない、『あれ』じゃないよ、ウィル……！ 君は一体何をしているんだ」

心底呆れたような相方の声に、ウィリアムはほけほけと戦利品を軽く振って見せた。

「ほら、お酒。買うと高いから」

「君ねー」

「あ、流石にダリアは飲めないだろうけどね」

欠片も反省の色を見せないウィリアムに、クロスは最早何も言わずこめかみを強く揉んだ。

一見するといつもクロスがウィリアムを振り回しているように見られがちだが——そしてその印象は概ね間違っていないのだが——、それでいて突然突拍子もない事をし出すのがこの男なのである。

「お風呂入ってから飲む？」

「……………そうする」

クロスは暫く半眼で相棒を睨め付けていたが、諦めたように溜め息を吐くと身を翻した。部屋に戻って風呂に入る心算だろう。

「もう一発やるかあ？」

「——」

向かいの男に言われて、ウィリアムは瞬いた。ちらりと時計を確認する。そう言えば、夜風を浴びに行くとダリアが出て行ってから、結構な時間が経っている。治安の良い場所だし、遠くには行くなとクロスと二人でしつこい程言い聞かせはしたが、そろそろ迎えに行った方が良さだろう。

「——いえ、残念ですけど」

戻って来てダリアがいなかったら、今度はクロスが迎えに行くと言い出しかねない。お転婆な少女二人の面倒を見るのも、なかなか大変なのだ。

不満げに声を上げる男達からの誘いを丁重に断って、ダリアは上着を羽織った。靴を引っ掛けて、表に出る。

そろそろ王都が近い。街を見ながらゆっくり行っても、四、五日中には辿り着けるだろう。王都と同じ赤煉瓦の街並みは、浮浪者もない至極平和なものである。

しかし、一步小路へと入り込めばそうとも言えないのだろう——そう、表が平和な地であるからこそ。

人が集まるというのは、結局はそういう事だ。

さて、小柄な少女はどこにいるかと視線を巡らせる。お転婆で小生意気なところもあるが、基本的にはお嬢様らしく素直な子供なので、頷いた事に対して嘘はない筈だ。すぐに見付かるだろう。

宿屋の周りは特に活気に溢れている。可愛らしい雑貨を取り扱っている店に、ウィリアムは見当を付けて入って行った。

「……あれ」

いない。予測が外れたかと、彼は首を傾げた——周囲の店を虱潰しに探すのが早いのか。どうせ、そんなに手間は掛からないのだし。

宿屋に近い方から、一件、二件と入って確認していく。月は明るくて、電灯が要らないくらいだった。

だからだろう。その姿を見付けたのは、完全に、単なる偶然だった。

ここ最近ですっかり見慣れた金の髪。小柄な少女の姿が店の陰に隠れるようにしてあった事に、ウィリアムは顔を顰めた——何か、厄介事だろうか。

迎えに来て良かった——そう思いながら、彼はその姿に近付く。少女の隣には男の姿がある。

「ダリ——」

いつもよりやや鋭い、低めの声で名を呼ぼうとしたウィリアムは、男の姿を見て言葉を飲み込んだ。咄嗟に店の陰に隠れる。

「……え」

「————」

「————」

会話は聞こえない。どきどきと鳴る胸を押さえながら、ウィリアムは浅い呼吸を繰り返して、そして。

眉を寄せて、溜め息を吐き出した。

「ああ、ちょっと、そこの君」

三人で街を歩いている途中、唐突にクロスが通り掛けの少女に声を掛けた。立ち止まったクロスに数歩遅れて、ウィリアムとダリアが振り返る。

「どうしたの？」

「クロス？」

首を傾げる二人に片眼を瞑って、クロスは少女の手を取った――案の定、相手がぱっと顔を赤らめる。

「ご機嫌良う、可愛らしいお嬢さん」

「は、は、はい！」

長身の美『少年』に声を掛けられて上擦った声で返答した少女は、花売りのようだった。地方の花売りは大概粗末な格好をしている事が多いが、流石にこの辺りでは花に金を出す人間も多いのだろう、貧しいながらも人間らしい生活を送れているようだ。

少しだけ解れていた髪を優しく梳いてやりながら、クロスは微笑んだ。

「花を二本くれないかな、桃色と黄色の――そう、それで良い」

「有り難う御座います」

紅潮した頬を緩ませる姿は愛らしい。それに眼を細めて、クロスは受け取った花の内の一本に柔らかく口付けた。

薄い唇に、黄色が触れる――夢でも見ているかのような表情でそれを眺めていた少女は、突然眼の前に差し出された花に眼を瞬かせた。

「……え？」

「どうぞ、お嬢さん」

「え、あの」

戸惑った声を上げる少女の反応すら好ましいというように、クロスは微笑んだ。

元は白いのだろう、土と埃に汚れた手をそっと取って、たった今花卉に口付けた黄色い花を握らせる。

「一つは、君に」

「そんな――」

「良いんだよ。どうか乾いた私の心を潤す為に一役買ってくれないか」

耳に心地良い低めの声で囁かれて、少女はふらふらと頷いた。

「は、はい」

「有り難う」

薄茶の髪に花を差し込んで、クロスは彼女の額に軽く口付ける。ちょうど、先程花卉にそうしたように、優しく。

「じゃあ、これは貰っておくよ」

「はい――」

優雅な仕草でひらと手を振って、クロスは再び歩き出した。残った一輪は、既に慣れた表情で見守っていたダリアに差し出す。



「どうぞ、ダリア」

「……有り難う、クロス」

やや呆れた声で受け取ると、少女は苦笑した。

「そうね、何だか久し振りに見た気がするわ」

「うん、何がだい？」

「……いいえ」

首を振って、ダリアは改めてにっこりと笑う。

「綺麗な花ね。有り難う」

「だろう？ 桃色のね——私には似合わないけれど、君にはぴったりだ」

気を落とすでもなく軽く言うクロスに、ダリアは少しだけ眉を上げた。

髪飾りに花を添えようとしている年上の少女にされるがままになりながら、怒ったように口を開く。

「あら、そんな事はないわ。貴女にも似合うわよ、クロス」

「——そう？」

その言葉が予想外だったのだろう、切れ長の眼を丸くして、彼女は頬を緩ませた。

「だと、嬉しいな」

ふわり、としたその笑みに、ダリアは瞬いた。それから、そっと眼を細める。

「そうよ。——可愛い所もあるのね」

自身を見詰める、その瞳が思いがけず優しいものだったから、クロスはほんの数秒、呼吸を止めた——赤らんだ顔を隠すように、ふいと顔を背ける。

「年上をからかうな、ダリア」

「ほら、可愛い」

くすくすと笑うダリアに、クロスは溜め息を吐いた。態とらしく髪を掻き上げると、脱力したように笑みを溢す。

「全く、仕様が無い娘だね……」

「お互い様でしょ？」

少女二人が顔を見合わせて、くすくすと笑う。

それを後ろのウィリアムが、複雑そうな表情で見詰めていた。

風呂場から、シャワーの音が聞こえて来る。

風呂から上がったばかりのクロスは、まだ濡れたままの髪を拭いながらほうと息を吐き出した。

「お帰り、クロス」

「うん」

ウィリアムから掛けられた声にこっくりと子供じみた仕草で頷きながら、寝台に勢いよく腰を下ろす。

「今はダリア？」

「そう。ウィルはこの後な」

「はいはい」

勝手に決定された事にも苦笑するだけであっさりと頷いて、ウィリアムは窓を開けた。少々籠もっていた室内の空気を入れ換える。

鼻をすんと鳴らして、クロスは軽く眉を上げた。

「ウィル」

「うん？」

立ち上がって、振り返ったウィリアムにぴしりと指を突き付ける。

「煙草」

「ありゃ、……バレたか」

慌てて臭いを誤魔化す心算が、窓を開けた事が決定打になっただけらしい。

降参するように軽く手を上げて笑って、彼は窓を開けたままに自分の寝台に座った。

「ごめんね。クロス、煙草嫌いなのに」

「この前の分は捨てただろ？ また買ったのか」

「つい」

叱られた子供のように身を竦めるウィリアムを、半眼で睨む。

自身も寝台に座り、ぱたぱたとタオルで自分を扇ぎながら、クロスは唇を尖らせた。

「全く、ダリアもいるのに！」

「……うん」

「——」

少しだけ、ウィリアムの反応が遅れた。

それを確認すると、クロスはちらりと視線だけを寄越した。再度立ち上がり、ポットから作り置きのお茶を注ぐ。

無言でそれをウィリアムに渡し、彼女は彼の隣に座り直した。

「ウィル」

「……うん」

「何か、あったか？」

すん、と鼻から息を吸い込む。強い花の香りが、鼻孔を刺激した。

「……うん」

こくり、と喉を鳴らして一口飲む。安っぽい味にほうと息を吐いて、ウィリアムはカップを置いた。

「ほら、クロス。もうちょっとちゃんと髪拭いて」

「ああ、悪い。……って、ウィル」

「誤魔化さないから」

言ってやると、渋々大人しくなって髪を拭かれているクロスに吹き出しそうになりながら、ウィリアムは眼を細めた。

銀の髪は酷く艶やかだ。冬の空気に冷やされた刃のような色。

昔から、その煌めきだけを目印に歩いて来た。

「クロス」

「何だ、早く言え」

「……ダリアの事なんだけどね、あんまり信用しない方が良くも知れないよ」

クロスの動きが止まった。

ウィリアムは黙ったまま、少女の髪を拭き続けている。

暫しの沈黙。

「……ふざけるな、ウィル。流石に怒るよ？」

「君は元々気が短いだろ。――残念ながら、大真面目だ」

少年の手が止まった。少女の無骨だが細い右手が、相手の左手を掴んでいる。

髪の手から水が滴らない事を確認すると、ウィリアムは頷いて自分から手を引いた。自然、少女が手を放す。

タオルをテーブルに放り投げると、ウィリアムはクロスと真っ直ぐに視線を合わせた。

射抜くような、強い視線。抜き身の刃より尚鋭いそれを、彼は愛していた。

「この前、偶然見たんだけどね」

「何を」

「ダリアが話してたんだよ。――青い蝶の刺青を持つ男と」

「――――」

クロスははっきりと息を飲んだ。――青い蝶。それは、パールを頭目とする《ユリシーズ》の一員であるという証だ。

「嘘だ」

「本当に、そう思う？」

互いに、視線は逸らさなかった。

「良い娘じゃないか、君の勘違いだよ。青でも、別の形だったかも知れない。いつだ？」

「この前の、……夜、外でだけど」

「ほら」

にっこりとそう言うクロスに、ウィリアムははっきりと眉を寄せた。

「クロス！」

「判っている」

何か言いたげなウィリアムの言葉を、クロスは強引に遮った。ぐっと言葉に詰まって顔を歪め

る幼馴染に、少女は微笑む。

「君の事は信頼している。比べる心算は無いけれど、多分――ダリアよりも」

「……………」

苦々しげな表情を隠そうともしない少年に、クロスは苦笑した。

「けれど、彼女の事も信頼しているんだよ――あの、愛らしい天使をね」

「クロス――！」

「ただいま、クロス、ウィリアム」

「「！」」

唐突に掛けられた声に、二人は驚いて振り返った。その勢いに、入って来たダリアが一步退く

。

「ど、どうかしたの？」

二人は反射的に微笑を返した。

「いいや、何も？」

「うん、お帰り。ちゃんと温まった？」

「さあ、冷えるよ。おいで、髪を乾かしてあげるから」

「自分のは適当なクセに――」

「ウィル、煩い」

「……？」

ダリアは暫し不思議そうな表情をしていたが、向けられた笑顔にほっとしたように、上気した頬を緩ませた。

「ええ、お願いね、クロス」

夜の静寂など、この街はどこかに置き忘れて来たようだった。

光と光の間を、クロスは無駄の無い動きで擦り抜けた。光と光、陰と陰、人と人の間。どれも同じようなものだ。

生憎誰も、気付いてはいないようだけれど。

「お兄さん」

呼び止められて、クロスはちらりと視線を落とした――年端もいかぬ少女が、彼女の旅装の裾を掴んでいた。

「お兄さん、今お暇ですか？」

どこか切羽詰まった表情で、少女は問うた。たった今擦れ違おうとしただけの、名前すら知らない年上の男――少なくとも彼女はそう認識しているだろう――に向かって。

「お兄さん、お兄さん、あたしを買いませんか？ 何でもしますよ、安いです。お兄さん、お兄さん、お暇なら私で暇を潰しませんか？」

「――――」

クロスは綺麗に微笑んだ。王都のすぐ傍らですら、こんな存在がいるのは当然なのだという事を、彼女は今まで知らなかった。

ちらりと前方を確認してから、早口に言う。

「お気持ちだけ貰っておくよ、可愛らしいお嬢さん。――さ、これを持って、早くお行き。余所見をしておいででないよ」

小さな手に小金を握らせると、少女は元々丸い眼を一層丸く見開いた。

「お兄さん」

「良い夜を」

何か言おうとした少女の言葉を強引に遮って、クロスは彼女の荒れ果てた手を取って軽く口付けた。顔を真っ赤に染めた彼女にもう一度微笑んで、後は振り返らずに再び早足で歩き出す。

小柄な背中を見失わずにいられた事に、クロスはほっと安堵の息を吐き出した。

夜の浅い時間だ。早めに就寝したクロスとウィリアムの眼を盗むようにして起き出したダリアの後を、クロスはただ追っていた。

無論、こんな時間にあんなに小さな少女一人を歩かせておくのが不安だということもある。しかし、それより何より――クロスの中では、ウィリアムから言われた忠告が回っていたのだ。

ダリアを信用している。信頼している。それは事実だった。まだ知り合っ間もない、愛らしく、優しく、それでいて意外に気が強く、真っ直ぐな性質の少女。彼女の言葉に、クロスは確かに救われた。年齢に合わない、時にクロスよりも年上であるかのような振る舞いをするダリアに、その落ち着いた態度に、クロスは心は不思議と安らいだのだ。

クロスはダリアを信じていた。《ユリシーズ》と関わりがあるなんて、何かの間違いに決まっている。

少女はそう確信しており――しかしそれ以上に、彼女の中でウィリアムの言葉というのは大きな位置を占めていた。

物心が付いた頃から、ずっと一緒にいた。剣術を習う時も、勉学を教わる時も。年の近い人間が、村で互いの他には数人しかいなかったというのも大きいだろう。この先もずっとあの小さな小さな村での日常を一緒に過ごしていくのだと、クロスは信じて疑っていなかったのだ――あの、悪夢の日まで。

弱気で弱腰で、昔からクロスに振り回されてばかりいた。いざ拳や剣を交えれば強いのは確かなのに、相手に対して限界まで譲って仕舞う程のお人好しだった。それでいて突拍子もなく馬鹿をやらかして、それまで何故かクロスの所為にされて彼女が怒られる破目になった事もあった。ウィリアムが泣き顔で自己申告をした時には、大人達が酷く驚いていた。

成長した今は、確かに弱気で弱腰でお人好しだけれども、それだけではなくになった。いざとなれば街のチンピラ連中に平然と笑いながら喧嘩を売るような一面もあるのは、クロスしか知らない事だ。

ダリアを信じている。しかしそれ以上に、ウィリアムの言葉はクロスの胸に重く押し掛かっていた。ウィリアムがクロスの事を考えて言ってくれているのを、彼女は判っていたからだ。

信じるというのは、裏切られても構わないという事だ。事実クロスは、ダリアに本当に騙されていても、彼女を憎む事はないだろう。

それは、事実だった。

クロスが過剰に反応したのは、ダリアが関わっているのが《ユリシーズ》かも知れないと、ウィリアムが言っていたからだ。

強盗集団、《ユリシーズ》――クロスから何もかもを奪った、青い髪の男が率いる集団。

それは、駄目だった。

それだけは。

騙すとか騙さないとか、そんな話ですらない。

その時はきっと、クロスは、ダリアを許す事が出来ない。

否――許す、許さないの問題ではないのだろう――もしもダリアが自分達を騙していたのだとしたら、彼女が容赦を求める訳もない。

クロスはダリアを信じていた。だから、ウィリアムの言葉とはいえ、それが揺らぎそうになる自分こそを、彼女は嫌悪した。

故に、彼女はここにいる。夜の中を泳ぐ、小さな背中を追って。

先程から、少女の足取りには迷う様子が無い。疲れた様子も見せない彼女に、クロスは少々驚いていた――見た目よりも活発なのは知っていたのだが。

人気が無くなってくると、追う事は容易だがその分見付き易くなるので、どうしても距離を置かざるを得ない。物陰に隠れるようにして小さな姿を眼で追っていた彼女は、突然その背中が消えた気がして足を止めた。

「え……」

「――て、放しなさい！」

呆然としたクロスの耳に飛び込む、甲高い悲鳴。ダリアに何かあったのだ――漸くそう気付いて、クロスは腰の長剣に手を掛けた。

「ダリア!？」

一步、踏み出す。数人の男に取り押さえられる細い少女の姿にかっと視界が赤く染まり、彼等を散らそうと更に足を動かして、

かくん、と力が抜けた。

「……………あ……？」

後頭部に鈍く響く、激痛。後ろから殴られたのだと理解し、薄らぐ視界の中で、ダリアが呆然と唇を動かした。

「クロス……!？」

頭の痛みで、眼が覚めた。

「――ロス、起きた、クロス？」

耳にしっかりと馴染む、声。世界で一番安心する声だ。

痛みも相俟ってもう一度落ちそうになる意識が、突然肩を揺さぶられた事で覚醒した。

「ん――ウィル……？」

「ああ、ごめん、痛くなかった？」

低く呻くと、ぱっと手が離れる。ぼんやりと瞼を上げると、霞んだ視界に見慣れた少年が飛び込んだ。

「大丈夫、クロス？」

「一体、何が……」

後頭部の痛みにもう一度呻く。そこで漸く、頭を殴られた事を思い出した。それに、ダリアが攫われた事も。

「そうだ――ダリア、ダリアは!？」

「いない。起きたらダリアもクロスもないから、探し回ったよ」

「私はどこに倒れていた？」

今にも胸倉に掴み掛かりそうな勢いで迫るクロスにやや身を引きながら、ウィリアムは眉を寄せた。

「街の外れに、倒れていたけど……？ 本当に、運が良か――」

「良くない」

少年の台詞を、少女は固い声で遮った。ぐるりと視界を巡らせると、今日泊まっている宿だという事が判る。

「今は何時だ？」

「もう少しで朝焼けだよ。――クロス？」

「ダリアがいない。ダリアが――」

「だから、クロスが知っているだろうって――」

そこで、ウィリアムはふと眉を寄せた。

「あれ？」

「ダリアが攫われた」

「まさか――あ、ちょっと、まだ動いたら……」

制する声を見殺しして、クロスは立ち上がる。続く頭痛は、意識から追い払った。

ふと思い付いてダリアの寝台の横に立ち、敷布を捲り上げる。元々は着の身のままだった彼女の荷物は殆どない。

ぱたぱたと何かの感触を探すように寝具を叩き、少し考えるとクロスはその下に手を突っ込んだ。

「……何？ それ――」

中から出て来たのは、一通の素っ気無い封筒だった。その中身を取り出して一瞥すると、軽く頭を振ってウィリアムに投げ渡す。



「これ――」

同じように書かれた内容をざっと読み終えて、ウィリアムは眉を寄せた。中には、同行者を害されたくなくば何時にどこに来いといった旨の文が綴られている。

はっきりと息を飲んだウィリアムに、クロスは苦く笑った。無理矢理に作ったような笑顔だった。

「何も気付かなかった訳だね、私達は。それどころか――」

「……待って、クロス。それは僕が悪い。それに、後悔している暇は無いよ」

「そうだな。捜さないで……！」

歯噛みして、クロスは拳をきつく握った。せめて自分も一緒に攫ってくれば良かったものを。一人で心細い思いをしているだろう。

「一先ず、クロスが倒れていた辺りだね」

「うん。――済まない……」

今にも崩れ落ちそうなクロスに、ウィリアムは微笑を向けた。

「大丈夫、きっと無事だよ」

「ああ……」

根拠の無い言葉に、しかしクロスはぐっと唇を噛んで頷く。

それに同じように頷きを返しながら、ウィリアムは忌々しげな表情で、手の中の手紙を備え付けの灰皿に放り込むと火を付けた。

東の空が、薄く明るんで来ていた。

「……？」

ぽちゃん、と。

水の滴る音が、聴覚を刺激した。

ぽちゃん。

ぽちゃん。

一定の間隔で響く音が、一瞬、ダリアの意識から現実感を奪った。しかし次の瞬間には、ダリアは状況を正確に理解している。

捕まったのだ——そう、呼び出されて向かった場所で、《ユリシーズ》の人間に。

ぽちゃん、と音が響く。

それが、中途半端に閉められた蛇口から滴る水の音である事を薄目で確認し、それからダリアは、注意深く周囲を観察した。

がらんとした、広い屋内だ。隅の方に煉瓦が積み上げられているという事は、建設途中で投げ出された廃屋かも知れない。無意味な広さは、部屋の壁が出来上がる前に、工事が中断したからだろう。面倒臭いからと契約を変更しないまま、いつまでも水道が通っている場合がある。そういう場所は、性質の悪い人間の溜まり場になり易いのだ。

煉瓦の壁で囲われてはいたが、体が横たえられているのは土の上だ。床も作られる前だったらしい。外枠だけが出来たような箱の中に、無造作に転がされている。

眼を閉じて、気配を数える。八人、九人——ちょうど、十人。気を失っていたダリアを囲むような位置だ。恐らくは各々好き勝手な事をしているのだろう、下らない会話が耳に入る。声からして、全員が男。《ユリシーズ》の構成メンバーを考えれば、殆どが体格の良い三十代前半の男の筈だ。

今は何時だろう。クロスはいないようだが、もしかしたら別室にいるのかも知れない。最後に見た少女の顔を思い出す。ただこちらを案じていた、真っ直ぐで曇りの無い瞳。

時間を確認しようと、薄らと瞼を上げる。気付かれはしないだろうと高を括っていたのだが、甘かったらしい。男の一人と、眼が合った。

にやりと、男が口角を上げる。三十代の後半か、四十代の前半だろうという年頃の男だった。

「おっと、起きたか、オヒメさま」

「……………」

瞬間、ダリアは咄嗟にきつと男を睨み据えたが、息を飲んだのは相手に気付かれただろう。恐らく、他の男達にも。

案の定、幾つかの笑い声が耳に障った。

両腕は後ろで纏められ、何かで縛られているようだった。足は自由だが、寝転がされた状況ではどうしようもない。口と眼が覆われていないのが幸いだった。

「大声を出しても無駄だぜ。こんな所、誰も来やしねえ」

「……でしょうね」

予想通りの言葉に、ダリアは嘆息した。余程人気の無い場所か、もしくは悲鳴なぞ誰も気にしない程に治安の悪い場所である筈だ。

頭の中で数ヶ所の候補を挙げながらも、青褪める顔は誤魔化しようがない。

「強気だなあ、嬢ちゃん！ おお、怖い怖い」

睨み付けられて、最初に眼が合った男が道化るようにそう言った。どうやら、この中では彼がリーダー格らしい。後ろは判らないが、この様子では室内に青い髪の男はいないようだ。

「悪い事は言わないわ、放しなさい」

精一杯顔を上げて、ダリアは高慢に言い放った。その反応に、男達の笑い声が大きくなる。

「良いねえ！」

「将来が楽しみだな、おい」

「本当、楽しみだなあ。残念」

「残念無念！ 一一何しろ」

後ろにいたのだろう、やや若い男が回り込んで、ダリアの顔を覗き込んだ。

「今日があんたの命日だからな。なあ、嬢ちゃん？」

「一一あら、あたしを殺すの？」

少しだけ意外な思いで、ダリアは首を傾げた。どこかに売られる、というのがセオリーだろうと考えていたのだが。

「へえ、冷静だな。いつまで続くか一一」

「殺せ、ってな。頭からの命令だ。下手に売るより、良い金が手に入るんだと」

かしら、とダリアは頭の中で繰り返した。考えるまでもなく、パールの事だろう。

「まあ、でも一一」

若い男が、未発達なダリアの体を舐るように見下ろした。好色な、反吐の出る視線だ。

「.....何？」

「殺す前にちょっと楽しい思いするくらい、良いよなあ？」

震える声で問うたダリアを嘲笑うように不自然に優しい声音でそう言って、男が少女の体に跨る。

たまらず彼女は悲鳴を上げた。

「止めて、触らないで！」

「平気平気。すぐ気持ち良くなるぜ。なあ、嬢ちゃん」

「クロスは一一！」

「あ？ ああ、あいつか。顔が良くても男にゃ用はねえからな。置き去りにして来たよ一一何だ、寂しいのか？ 可哀想になあ。今からでも連れて来てやろうか？」

思わず呼んだ名前にそう返されて、ダリアはほっと息を吐き出した。上に乗った男が態とらしく片眉を上げる。

「優しいなあ。心配してたのか、この状況で？ すぐに何も判らなくなるってのに！」

男が笑う。

周囲を囲む男達の、重なる嘲笑に合わせるように、ダリアは。

一一ひっそりと、笑った。

それは、偶然だった。

陽はもう完全に昇り切っている。

一先ずは目撃者探しだと、二人で宿を飛び出して数時間。もう少ししたら、一度宿に戻らなければならない。

「申し訳無いお嬢さん、ちょっとお時間を頂けないかな――」

にっこりと微笑んで、年下らしい少女から話を聞き出す。欲しい情報が無かった事に落胆しつつ、それを感じさせないように穏やかな表情のまま別れを告げる。

何回繰り返したか判らないそれを終えると、どっと疲れが押し寄せてきた。検討もつかないからこそ、徒労感に心を折られそうになる。

「――ちっ」

舌打ちして、クロスはざっと身を翻した。別行動をしているウィリアムは、何か判っただろうか。

真っ先に行ったのはクロスが先程倒れていた場所だったが、案の定、そこには何も残っていなかった。夜遅かった事もあって、あんな場所に誰かがいたとも思えない。

一人で、寂しい思いをしてはいないだろうか。

酷い目に遭ってはいないか。

せめて、私も一緒に攫ってくれば良かったのに――。

考えていても浮かんでくるのは自責と後悔の念ばかりで、前向きな思考も打開策も思い付きはしないのだ。

道の脇で話し込んでいる三人の男性に、ダリアは声を掛けた。

「失礼、少し良いでしょうか？」

「うん？」

「何だ、兄ちゃん？」

「十三、四くらいの、金の短い癖毛に碧眼の少女を捜しているのだが、どこかで見ていないか？」

何度となく口にした問いを発するが、男達は顔を見合わせ、首を横に振った。

「悪いな」

「いや、――時間を取らせて申し訳無い。有り難う。他に、何か思い出したら教えて欲しい」

そう言って宿の名前を教えると、知っていたらしい。頼もしく頷かれた。

「おう、任せろ」

「大変だな」

「頑張れよ、兄ちゃん」

「ああ、有り難う」

もう一度礼を言って、クロスは頭を下げた。すぐにまた踵を返し、視線を巡らせる。

それを見付けたのは、全くの偶然だった。

少し人気の無い場所まで来た時、彼女はふと見慣れた背中を認めて瞬いた。

「ウィル！」

何か判ったかと声を上げるが、相手に気付いた様子はない。ウィリアムは、一人の男と話し込んでいるようだった。

「……？」

首を傾げ、二人に近付く。

それに気付いたのは、全くの偶然だった。

聞き慣れた、声。

聞き慣れた、

いつもの声が、言葉を紡ぐ。

「——ご苦労様。良かったよ、ダリアを捕まえられたみたいで」

「!？」

その言葉が聞こえた瞬間、咄嗟にクロスは身を隠していた。どきどきと、鼓動が煩い。この男は何を言っているのかと、理解が追い付かない。

「——うん、——うん……そう。良いよ、彼女を殺してさえくれれば、途中はどうなっても構わないから。ああ、死体を見付けたら、どんな顔をするかな——クロスは」

何、を。

「なっ……！」

何を言っているのだろう、ウィリアムは。

この男は。

耳の後ろに心臓があるようだった。自分の脈動の音が煩くて、ウィリアムの声が酷く遠く聞こえる。

半ば呆然と、相手の男を見遣る。当然のように、ウィリアムが微笑みながら話し掛けている相手。

隠そうともしていない、剥き出しの肩に彫り込まれた、青い蝶——。

何をしているのだろう、と思った。

何を言っているのだろう。

何を考えているのだろう。

悪い、冗談だろう。まさか、そんな、見覚えのある——そう、ダリアを連れ去った《ユリシーズ》の男に、相棒の少年がにこやかに礼を言っているなんて——。

青い、蝶。

青い髪の男、パール率いる強盗集団、《ユリシーズ》の一員である、証だ。

聞き間違いだと、思いたかった。

勘違いだと。——そう、ちょうど、ダリアに対する時のように。

しかし、聞き間違いも勘違いも有り得ない事は、誰よりもクロスが判っていた。

「ウィル……？」

殆ど無意識に、名前を呼ぶ。

気付いた二人が、振り返る。ダリアは眼を伏せた。

そうだ。

ああ、何故気付かなかったのだろう。

先程気を失う前、自分を押さえ付けた腕は、酷く馴染みのあるものだったではないか――。

いつかの記憶の中で、雀斑顔が、優しく微笑んだ。

少女は吼えた。あの、赤い夢の夜のように。

「ウィリアム！」

呼ばれた少年が眼を見開く。

赤い。

赤い。

視界が赤い、それは怒りだ。

眩暈がした。

ウィリアムの横にいた《ユリシーズ》の男を、抜き払った一刀で斬り捨てる。

血が吹き出す。

赤が散った。

赤い。

赤い。

何もかもが。

白銀が翻る。研ぎ澄まされた刃のような色の、彼女の髪が。

そのままひたりと喉に剣先を突き付けられたウィリアムは、動じるでもなく微笑んだ。

いつものようにいつものような、穏やかな雀斑顔で。

クロスの大好きな、あの笑顔で。

「ウィル——！」

「ああ……」

ウィリアムは嘆息した。それは悲嘆ではない、どちらかといえば満足げな、恍惚とした表情で

。

「ばれちゃったか」

自分が責められる事をしたという、そんな簡単な事すら理解していないように。

「先程私を気絶させたのは君か！」

ウィリアムは笑う。

「数日前、宿を襲わせたのも！」

ウィリアムは笑う。

「今日、ダリアを攫わせたのも！」

ウィリアムは笑う。

「彼女を、——これから、殺させようとしているのも！」

ウィリアムは、笑った。

弱気で弱腰でお人好しな、昔からの変わらない表情で。

「ごめんね、クロス」

「何故……！」

血を吐き出すように、クロスは悲痛な声を上げた。ぶれた切っ先がウィリアムの首筋を僅かに傷付けて、その事に当の少年よりも少女の方が動揺する。

「何故だ、答えろ！」

「何故って――」

それこそ、何故問われているのか判らないとでもいうように。

「だって、君には僕以外、必要無いでしょう？」

「――え……？」

至極当然のように返された答えに、クロスは愕然とした。

見慣れた双眸を真っ直ぐに見据える。縋るように、そこに狂気を探すように。そうして彼女は、彼が全くの正気である事を知って絶望するのだ。

「ウィル……？」

「何、クロス？」

柔らかい、耳に心地良い声だ。何度も何度も、数え切れないくらい、この声に救われた。

助けられた。

そう、あの時も。

「大丈夫、クロス。安心して良いよ。ダリアがいなくなっても、他の誰が君の前からいなくなっても、僕だけはずっと君の傍にいるから」

「――――！」

どこかで聞いた、言葉だった。

そう、あの時に。

クロスという少女が全てを失った、あの日に。

彼女はその問いを喉から絞り出した。違っていてくれと、祈るように。

「ウィル……？ 君、私のお父さんと、お母さんを――」

「あぁ――」

「村の、皆を――！」

小さな子供が痙攣を起こしているのに戸惑ったような顔で、ウィリアムは苦笑した。

宥めるように、彼は眼を細める。

「君って単純なようで案外鋭いから、時々とっても困るなぁ」

「――はっ……」

力が、抜ける。

手が剣を取り落としそうになり、必死でそれを堪えてウィリアムの白い喉に切っ先を突き付け続ける。

何を言っているのだろう、この男は。

何を、下らない冗談を。

「ねえ、だってさ」

何を、馬鹿な事を。

「あの人達がいたら、ずっと君は僕のものにならないでしょう。漸く僕のものになったと思ったら、今度はダリアと仲良くなっちゃうし」

何を、馬鹿な。

「――ウィリアム！」

少女の怒声と共に、キン、と金属と金属が甲高い音を立ててぶつかった。



クロスの長剣を自分の短剣で弾いたウィリアムは、少しだけ眉を下げた。

「クロスー」

「ダリアはどこだ！」

「さあ？」

手の中でくるりと短剣を回して、少年は軽い仕草でそれを構えた。

「今頃、殺されてるんじゃないかな？」

「貴様ー！」

剣が、走る。

それを流して、ウィリアムは一步下がりて剣を正面に据えた。

「君に殺されるなら、それも魅力的だけど。ーねえ、気にする事はないよ。誰が死のうと誰が生きようと、僕達には関係の無い話なんだから」

「黙れえ！」

光を弾いて、刃と刃が重なった。

ダリアは、笑った。

クロス達と行動を共にし始めてから、元の服装では目立つからと買って貰った洋服。質素な旅装だが、所々に小さな花があしらわれた、趣味の良いものだ。

ブラウスの前のボタンを、力任せに引き千切られる。中に着ていた薄手のシャツにまで手を掛けられたところで、ダリアは唐突に顔を上げた。

そうして、口を開く。

碧玉の瞳に、癖の強い、金色の髪。見る者は彼女を、天使のようだというだろう。

桜色の唇が、言葉を紡ぐ。

声は、透き通る鈴の音に似ていた。

「だから、放しなさいとー」

少女の横顔が、憂いを帯びて伏せられる。

瞬間。

「薄汚え手で触んなっつってんだろこのゲスチン野郎！」

華奢な体に跨っていた男の体が、冗談のように綺麗に吹き飛んだ。

「はっー」

「!？」

「なあ!？」

周囲の男達が、ぎょっとして後退る。彼等は、何が起こったのか一瞬理解出来なかった。

そう、一一理解出来なかった。

それが、致命的な隙を生んだ。

折れそうに細い足一本の力で大柄な男の体を蹴り飛ばしたダリアが立ち上がる。彼女は、そのままの流れるような動きで、隠し持っていた懐刀を後ろ手に投げ上げる。

刀が、回転しながら下に落ちる。ダリアがふっと笑い、その場で宙返りする。小さな刃は、見事なタイミングで少女を捕らえる無粋な縄のみを切断した。

「……え？」

「遅え！」

ダリアが叫びながら踏み込む。完全に声変わりを果たした、低い、一一少年の声。

顎を打ち砕かれた男が、呆気にとられた表情のまま床に沈んだ。

「な、な、何……!？」

「身体検査くらいしろよ、バーカ！」

思い切り馬鹿にした口調で、ダリアが一一今の今まで少女の顔をしていた少年が、笑う。

男達が自失から立ち直るまでに、既にダリアは六人もの男を倒しており一一そしてその時点で、彼等の数の有利は完全に崩れた。

また一人、鳩尾に膝を叩き込む。小さな体から繰り出されたものとは思えない鈍い音がして、男が泡を吹いて倒れた。

「七人！」

肘で、引き攣った表情を浮かべる顔面を砕く。

「八人！」

捕まえようとする男の手を搔い潜って逆にその手を掴み、土の床に叩き付ける。呻く男の下腹に、ダリアは止めとばかりに踵を降り下ろした。

「九！」

最後の男は、最初にダリアに声を掛けた男だ。髭に塗れた顔に飛び蹴りを食らわせる。

「――ラスト」

最早少女の素振りをかなぐり捨てて乱れた髪を搔き上げると、ダリアは静かな声でそう呟いた。

しかし、気は抜かない。

終わりではない。

それを、ダリアは知っていた。

「――へえ」

ぱちぱちと、その場に間の抜けた拍手の音が響いた――鋭い視線が、ぽっかりと空いた戸口に向けられる。

途中から入って来て他人事のように観戦していたこの男の名前を、ダリアは知っている。

青い髪。

空のようななどと決して言えない、海のようななどと決して言えない、不自然で無機的で他人に違和感しか齎さない、色だ。どこまでも人工的な、青。これが地毛だというのだから、成る程この男は《ユリシーズ》なのだろう――仮令、彼の性質が、救いを嘲笑し、蹂躪するものであっても。

この男の名前を、ダリアは知っていた。

「……………パール」

「お見事！ 流石は《エデン》長官子息ダリア殿――と、いった所かな？ 会うのは初めてだな」

「安心しろ、最初で最後だ」

「釣れねえなあ」

男は、笑った。

「まあ、殺せって言われたのがアンタだとは知らなかったがな。それに――そんな格好をしてるとも」

次に笑ったのはダリアだった。スカートの裾を、ついと持ち上げて見せる。

「可愛いだろ？」

にこりと、笑みを交わし合う。

突然、逆の戸口から男が飛び込んで来た。扉を作る前だったのだろう、正反対の位置にある戸口はどちらも、間の抜けた穴が空いているだけだ。

「ダリア！ ――って」

銃を片手に声を上げたナナトが、倒れている男達と、ダリアと相対する男を認識して首を傾げた。

拍子抜けしたような顔で、口を開く。

「……何だ、この状況は？」

「ナイスタイミング！ 剣貸せ、ナナちゃん！」

「だから誰がナナちゃんか——！」

言いつつきっちり腰に佩いていた剣を鞘ごと投げて寄越したナナトに満足げに笑って、ダリアはすらりと慣れた様子で長剣を抜いた。

二、三度調子を確認するように振ると、切っ先を青い髪の子——《ユリシーズ》頭目パールに真っ直ぐに突き付ける。

「罪人パール、《エデン》構成員作戦部所属、ナナトがてめえを拘束する！ ——良い子だから、大人しくしとけ」

「はっ、誰が！」

同じく長剣を抜くパールとダリアを見比べて、取り残されたナナトは一人、こめかみを強く揉んだ。

「今更だが、私の名前を勝手に使うな……！」

キン、キン、と高く鋭い音が、空気を震わせた。

人気の無い場所で良かったと、場違いにもクロスはそんな事を考えていた。だって、人が集まって来て仕舞ったら出来ないだろう、なあ。

殺し合いなんて、さ。

キン、キン、キン、と音がする度に、一步ずつクロスは下がる。隙を突いては大きく一步踏み込んで長剣を振るうが、右の短剣で防がれて左の短剣で斬り付けられて、少しずつ傷が増えていく。

「ねえ、もう止めようよ、クロス？」

「煩い」

「クロス、ねえ、君の事を傷付けたくないんだ」

「煩い！」

クロスは叫んで、また一步踏み出した。鋭い一撃に、反応が遅れたらしい。

薄く、ウィリアムの頬に赤い線が走った。

「……っ」

「なあ、君が気付いていないようだから念の為に言っておくけれどね」

震える切っ先を突き付けて、クロスは幼馴染の少年を真っ直ぐに睨み据えた。

「私を傷付けたのは、間違いなく君だよ」

「何を一言ってるの？」

閃いた白銀を、ウィリアムはそれよりもやや鈍い銀で弾く。

「ねえ、だって、ずっと不満だったんだよ？ これからはずっと僕と二人きりだと思っていたのに、あんな娘を拾ったりするから」

「ダリアに罪は無いだろう！ お父さんにも、お母さんにも——！」

「……クロス」

ふ、とウィリアムは溜め息を吐いた。それが聞き分けのない子供に対するもののようで、クロスは泣きたくなる。

駄目だ。

この男には、話が通じない。

「僕達を騙してたってのは本当。《エデン》と繋がっていたみたいだよ？ 徽章を付けた人間と話してたからね」

「……それは、知らなかったな。でも、君よりはずっと良いよ。選りに、選って——！」

「何、言ってるの？」

困ったように、ウィリアムは少しだけ眉を下げた。

浅く息を吐き、踏み込む。クロスが一刀なのに対し、相手は二刀だ。まともな鏝迫り合いに持ち込めば馬鹿を見る。

下から斜めに走った刃を、ウィリアムは左に引いて避けた。

「！」

右ががら空きだ——クロスが自分でそう認識すると同時、ウィリアムに右腕を掴まれる。

「放せ！」

「ねえ、クロス。止めようよ」

「ウィル——」

「だって、邪魔でしょう？ ダリアも、——それに、君を慕っていた、君が慕っていた、皆も」

「は、——」

クロスは、笑った。

最早何に絶望すれば良いのかすら判らないとでもいうような、空っぽの笑みだった。

全てを諦めたかの、ような。

ゆっくりと、少女は少年の手に自身の左手を添える。己の右腕を掴む彼の手を、宥めるように

。

「ウィル」

クロスは、笑った。それしか知らない、生まれたての子供のような顔で。

何も知らない。

善も。

悪も。

多分、その違いすら。

そうして彼女は、口を開く。

「ウィル、有り難う」

ぱっと、ウィリアムの顔が明るくなった。少女の理解を得たと嬉しそうに笑う幼馴染に応えるようにクロスは微笑み、微笑み、笑い掛けて——

そして、手の中に隠し持っていた針を、彼の腕に突き刺した。

「!？」

「こういうのは、君の方が得意だったね」

一瞬の痛みに、ウィリアムの表情が驚きで染まる。次いでその顔が青褪めたのは、彼がその意味を正確に理解したからだ。

「クロス——！」

「今まで有り難う、ウィリアム。私は間違いなく、君に救われていた——そう、ずっとね。この旅だって、きっかけは酷いものだったけれど悪くはなかったよ。——君と、一緒だったから」

「待——」

クロスに向かって伸ばされたウィリアムの腕が、途中で力を失って落ちる。

毒を受けて崩れ落ちた少年の体を見下ろして、クロスは静かに息を吐き出し、顔を歪めた。立ち尽くしたまま息を整えていると、ふと後ろの気配に気付く。

少女は咄嗟に振り向いて剣を構えた。

「誰だ！」

「いやァ、お見事！」

「は、——え？」

建物の横でぱちぱちと気の抜けた拍手をしている男の姿に、クロスは唾然とした。

「な、に……？」

「君、女の子でショ？ いやァ、もうあんまり勇ましくて、つい見守っちゃいましたヨー！」

「……は？」

眼の前の状況を理解出来ていないかのように暢気な表情で笑う、男の。

肩口に特徴的な《エデン》の徽章を認めて、クロスは今度こそ剣を取り落とした。

ナナの眼前で、長剣同士が高い音を立てて交わった。

力は、圧倒的にパールが上。対するダリアはといえば、早さと変則的な動きで相手を翻弄している。

「……ちっ、面倒臭いな、軽業師か、お前は！」

「褒めるなよ、恥ずかしいな」

舌打ちをしたパールに、ダリアが軽く飛び跳ねながら笑った。無骨な長剣は可憐な少女の姿には全く似つかわしくないものだったが、ダリアは当然のように軽々と扱っている。

「あんな格好で、よくもまあ……」

完全に傍観者になっているナナが、呆れたように呟いた。いつも着ているようなびらびらふりふりのワンピースよりは幾らかマシだろうが、それでも動き易い服装とは言えないだろう。

煉瓦に囲まれ、広さに限りのある空間は、壁すら足場にするダリアに随分と有利になる。逆に長剣を少年に渡して仕舞い、自慢の拳銃も二人が動き回っているには役に立たないナナに出来る事はといえば、邪魔にならないように壁に寄り掛かっているのが精々だ。

剣と剣の間で、火花が散った。

力比べになるよりも早く、ダリアは器用に剣を流す。

「このクソガキが！」

「おいおい、段々語彙が減ってるぜ、大丈夫か？」

弾むような足取りで距離を取りながら、少年は相手を嘲弄した。本当に嫌な子供だと、端から見ていたナナですら思う。恐らく、彼ならばとっくに怒りが振り切れているだろう。

パールは冷静だった。仕切り直しとばかりに、剣を構え直す。

「邪魔だなあ、こいつら」

つい先程自分で意識を刈り取った男達が転がっているのに、ダリアは理不尽にもそう呟いた。聞いたパールが、喉の奥で笑う。

「そう言うなよ、俺の部下だぜ」

「思ってもないクセに！」

ふん、と馬鹿にするように軽く鼻を鳴らして。

「だから、――部下を可愛がってくれた礼くらいは、しねえとなあ？」

「！」

パールが踏み込んだ。

右の腰から逆の肩に向けての一閃を、ダリアは後ろに飛んで避けた。地に手を突き、勢いのまま回転して着地する。

「ダリア！」

ナナの警告に顔を上げる。頭上に、パールの剣が迫っていた。

「おっと――」

「ちょこまかと元気だな、小僧」

「どうも。しつこい男はモテねえぜ？」

左手を突いて横に転がり、序でとばかりに足払いを仕掛ける。一步下がって避けたパールを追



うように、ダリアは低い姿勢のままで斬り掛かった。

「！」

反応が、遅れる。

男の大腿がざっくりと裂けた。バランスを崩した男の頭を容赦無く蹴り上げる。

「ぐっ——！」

「残念だったな」

にっこりと、ダリアが微笑んだ。

青い髪を見下ろして、ダリアがほんの一瞬、動きを止める——頭に浮かぶのは、一人の少女の顔だ。

この男を殺すと、そう叫んでいたクロス。

切っ先を上げる。

「……出来りゃあ、アンタに決着着けさせてやりたかったけどな」

眩き、ダリアは、くるりと剣を回して柄を男の首筋に叩き込んだ。

避け損ねたパールは、悔しげに顔を歪めて崩れ落ちる。それを確認すると、少年は一つ溜め息を吐き出して長剣を鞘に納めた。

「終わったか」

「ん。——仕事しろよ、ナナちゃん」

「それはそれで怒るだろうが、貴様は？」

片眼を眇めるナナトに剣を投げ渡して、ダリアはちらりと舌を出した。

「おっと、バレてる？」

「当然だ——ああ、こちらだ」

流れ込んで来た《エデン》の同僚に声を掛けて、ナナトは剣を腰に戻した。たった今まで大立ち回りを演じていたダリアはといえば、顔を顰めて乱れたスカートの裾を直している。

「ダリア？」

「……ちっ、ブラウス破りやがって、あのブサ面が——」

「そんな格好をしているからだろうが」

「貰いモンだ」

殊更不機嫌げなダリアに、ナナトはきょとんとして瞬いた。

「例の『クロス』か？」

「ああ。——あっちには」

「ジェスターが行ってる」

「激しく不安なのは何でだ——」

半眼で眩いたダリアが、考えを振り払うように軽く首を振った。

改めて少年の姿を眺めて頭痛がしたのだろう、片手で頭を抱えているナナトに、ダリアは鼻を鳴らす。

「悩むと禿げるぞ」

「貴様等の所為でな！」

渾身の叫びに、ダリアは声を立てて笑った。

そんな子供を呆れた表情で見遣り、《ユリシーズ》の人間を手際良く捕縛していく仲間を眺めながら、ふと思いついたように、ナナトは問いを口にする。

「ダリア」

「うん？」

「楽しかったか？」

「――」

その、問いに。

ダリアは刃の切っ先めいた鋭い眼差しの少女を思い浮かべて、それはそれは可愛らしく微笑んだ。

「それなりに、な」

誰だこれは。

訳も判らぬまま連れて来られた、王都のど真ん中の白い塔の一室で。

クロスはひたすら呆然としていた。

何度も頭の中で繰り返しては脳裏を上滑りする疑問を、もう一度思考に乗せる。

誰だ、これは。

穴が空く程、という表現がぴったりの勢いで凝視されている相手はといえば、反応が可笑しくて仕方無いような、けれども少しだけ困ったような顔で、身を固くしている。

「ええと、詰まりー」

「ダリ、ア？」

「ハイな。詰まりィ、ダリアは《エデン》長官子息なんですよォ」

言われた言葉——そうだ、あの男は確かジェスターと名乗っていた——が、頭の中でぐるぐると回る。

チョウカンシソク。

ちょうかんしそく。

……長官、子、息？

「し、そ、く？」

……………男？

「悪いな、クロス」

あまりにも予想通りの反応に、ダリアは苦笑した。服装を含め、その姿は完全に少年のもので、声も変声期を終えた低いものだ。ただ、整った顔の造作も、碧玉の瞳も癖の強い金の髪も——詰まりは天使めいた容貌は、全くのそのまま。

「おと、こ？」

「見ての通りだ」

にい、と唇の端を引き上げて笑う表情は、悪戯盛りの少年のものだ。

「——ってかァ、何で今日はそんな格好なんデス？」

「自由時間中。——母上は旅行だ」

ジェスターとダリアの遣り取りに顔を背けて咳払いをするナナトを、クロスは訳が判らないという表情で見遣った。それに、ジェスターがけらけらと笑う。

「ダリアが女装してる理由、教えて上げましょうかァ？」

「ジェスター！」

声を荒げて立ち上がるダリアに構わず、男は軽く片眼を瞑った。

「要するに、母君の『戦う女の子って素敵よね！』という一言で——まァ、それは可愛らしい奥様でありましてネ……」

「……………何だ、それは」

脱力して、クロスはがっくりと肩を落とした。——というか、それにしてもはやけに乗り気だったのではと思うのは気の所為か。自分は散々この少年に対して女に対するように接してきたのか

。そして旅の途中で入浴を見られたような気もするのだがそれは気にするべきなのだろうか――云々。

結局彼女は、全ての思考を放棄した。どうせ自分が足掻いたところで、どうあっても現実は覆らない。

「ジェスター……」

「ハイ、何デショー」

ソファに座り直し、じっとりと男を睨んでいたダリアが、嘆息一つで少女に視線を戻す。

クロスが無理矢理自分を納得させたのが判ったのか、ダリアはひょいと片眉を上げて、少しだけ笑った。

「ああ、まあ、良いや。……で、だ――ここからが本題」

「うん？」

「そこにいる――ジェスターに聞いたし、俺自身も見てる。アンタの剣の腕は結構なモンだぜ。――なあ、それ、活かす気ないか？」

悪戯めいた瞳で、ダリアはクロスを覗き込んだ。碧玉を向けられた少女が瞬く。

それは詰まり、と彼女は頭の中で整理する。

自分は今、彼等の所属する《エデン》に勧誘されているのだろうか。

右手を見詰めて、拳を握ってみる。硬く、女らしさとは程遠い、剣を持つ事に慣れた手だ。昔から父を師に己を磨き続けた。村が焼けてからは、殆ど死に物狂いで、ウィリアムを相手にして互いを高め続けた。

パールは今、檻の中にいるという。

それは自分にとって良い出来事の筈なのにどうにもしっくり来ないのは、この手であの青色を斬り殺す事が叶わなかったからだろうか。

殺す事だけを考え続けてきた訳ではない。彼女はそこで悲劇に浸る事が出来る程、便利な性格をしていなかったからだ。

けれど確かにあの男を殺す事が、自分の生きる目的だった。

そしてそんな旅の中でも、確かに楽しい時間はあった――全ては、ウィリアムが、途中からはダリアが傍にいたからだ。

けれど既にウィリアムは隣にいないし、別の場所に立つダリアからは誘いを受けた。

「……そうか」

クロスは、唐突に理解した。

ここが、自分の旅の終着点だったのか。

共に往く人間は、もう存在しないのだ。

ウィリアムは、《ユリシーズ》に村を襲わせダリアを狙わせ、裏で糸を引いていたのだという。本人からも、眼の前の少年からも聞いた事実だ。自分の眼を盗んで旅の途中で運び屋の真似事をしながら、それで稼いだ金で彼はパールに依頼したのだ。

――あの時。

彼を、殺そうと思った。

仕込んでいたのは致死性のある毒ではない。少しの間、動けなくなる程度のものだ。

止めは、この手で刺そうと思っていた。しかしあの時、特に止める様子もなかったジェスターの前で今一度振り上げた剣を静かに下ろしたのは、クロスの意志だ。

彼を、殺そうと思った。

殺せる訳もないのだ――大切な大切な、誰よりも大好きな、幼馴染なのだから。

仇敵と同じ、狭い牢獄に押し込められた少年に向かって、彼女は呟いた。

「君はそのまま、そこで見ている」

想いを空に、解かすように。

「――おい、クロス？」

黙り込んだかと思えば一人で何事かを呟き始めた少女に、恐る恐るといった様子でダリアが声を掛けた。それに対して、クロスは微笑む。

どうやら自分は居場所を奪われて、また別の人間に与えられようとしているらしい。

受け取るのも拒むのも、この意志一つだった。

「そうだな、じゃあ世話になろうか。どれ程役に立つかは、判らないけれども」

「――おう」

その言葉に一つ瞬いて、ダリアは嬉しそうに笑った。それを見て、ああ確かにこの少年はあの『少女』なのだとクロスは思う。

我知らず、彼女は頬を緩ませていた。

「――それにしても、惜しいなあ。実に惜しいよ。天使のような君の姿はもう見られないのかな」

いつもの甘ったるい口調でそう言ったクロスにダリアは少しだけ苦い顔をして、軽く首を振った。

「どうせ、母上が戻られたらまたする破目になるさ。まあ、俺も楽しんでる部分はあるけどな――そんな時は」

癖のある金色を自分で梳きながら、少年はふっと穏やかに吐息を吐き出す。

「また使わせて貰うぜ、あの髪飾り」

「――楽しみにしているよ、ダリア」

互いを正面から見据えて、二人は微笑んだ。